聞き書き

武左衛門相撲（別名・六地蔵相撲）

―愛媛県北宇和郡旧日吉村の民俗行事―

高津　勝　編

はじめに

松山出身の歌人・正岡子規は、「ベースボール狂」を自認するほど、この競技を熱愛していた。日本野球史の創生を彩るその体験は、彼の詩作や随筆に生き生きと綴られていて、そうした作品をとおして、私たちは、可能性に満ちた日本のスポーツの初期のありようを垣間見ることができる。このことに関連して、子規研究者・和田春樹「“ベースボールマン”子規」（1994）は、子規ともども、松山の子どもたちが正月に繰り広げた「橙（だいだい）投げ」を、子規のベースボールへの熱愛の原体験をなすものとして意義づけている。欧米近代のスポーツ文化を子規が受容する背景に、「橙投げ」という民俗的な遊びの体験が存在した、というのである。欧化にも国粋にも距離を置き、広い世界を視野に入れて日本の未来を展望した正岡子規。そして、子規とフォークロアとのかかわり。何という魅力的なテーマなのだろうか。

2011 年 1 月、和田の指摘に胸をときめかし、私は愛媛県立図書館の「えひめ資料室」（郷土資料室）にいた。「橙投げ」にかかわる民俗資料を、探し出そうと思い立ったのである。そこで、偶然出会ったのが、和歌森太郎編『宇和地帯の民俗』（1961）であった。

1959 年度に実施された総合調査の成果をふまえ、宇和島市と北宇和郡・南宇和郡の町村における伝承的生活慣行を集成した同書は、南予の民衆の活気に満ちた祭礼競技の伝統をも注目していた。しかし、同書は、前近代の宇和一帯を「発展のおくれた」、「渋滞」あるいは「停頓」した地帯とみなし、近代以降についても、交通・産業・教育の分野で近代化に「非常に遅くまで取りのこされ」、「一般生活の開化は遅滞した」地域であると認識していた。和歌森らは、こうした停滞性を前提に、この地域には「否応なしに古俗が大した遮断もなく伝えられて来たであろう」と推定し、「長いこと孤立的であったこの地帯に、旧態依然たるくらしぶりが久しく存続したことは当然である」と考え、「広く前近代的として包括できるような伝承」、すなわち「近代化の中に残る古俗」を収集しようと試みたのである。

では、長らく封建的な抑圧を強いられ、近代においてもなお停滞と孤立に甘んじる宇和の村々に、なにゆえ「古俗」が脈打ち、民間信仰や説話、芸能、舞踊、競技が豊かに存在するのか。こうした疑問は、停滞性や後進性、近代化からの逸脱や離隔を前提にした社会認識からは解き明かすことができない。なぜなら、古俗と開花、停滞と近代化という二項対立的な図式からは、民衆の活力と社会の変化を多様性においてリアルにとらえることができないからである。とはいえ、『宇和地帯の民俗』には、民衆の伝統的な身体競技が数多く綴られている。私が最も注目したのが、「日吉村鍵山では、旧 7 月 19 日の、医王寺で行なわれる「大日さん相撲」や、同月 24 日の「地蔵相撲」など、仏への奉納相撲が盛大に行なわれた。後者は今では「武左衛門相撲」とよばれ、百姓一揆の頭目であったという武左衛門の霊を慰めるために行なわれ、期日も 8 月 24 日に変わっている」という一節である。では、日吉の武左衛門相撲とは、どのようなものだろうか。

「義民伝承と地相撲」――新たなテーマを携え、私は旅に出た。

聞き書き　武左衛門相撲（別名・六地蔵相撲）
――愛媛県北宇和郡旧日吉村の民俗行事――

目次

はじめに
…… 1
Ⅰ．地相撲に託す人びとの願い：六地蔵と武左衛門への奉納―― 西村善太郎氏に聴く
…… 3
Ⅱ．三十三結びの大取組：ムラの安寧と繁栄の証 ―― 山本喜久夫氏に聴く
…… 15
Ⅲ．引き分けで再会を誓う結びの一番 ―― 山本決（さだむ）氏に聴く
…… 24
Ⅳ．仕事で鍛え、相撲で試す：賞金と名誉を競う素人力士 ―― 山口孝氏に聴く
…… 31
Ⅴ．峡谷に響く力士の息吹：人を育て、地域を拓く―― 宮本幸孝氏に聴く
…… 39
Ⅵ．義民伝承と民俗行事：六地蔵奉納武左衛門相撲のこと―― 大森時政氏に聴く
…… 47
資料 1．旧日吉村の民話（相撲のはなし）
…… 57
資料 2．旧日吉村における武左衛門顕彰事業・奉納相撲関係年表
…… 58
資料 3．地図――旧日吉村へのアクセス
…… 60
あとがき
…… 61

I

相撲に託す人々の願い：六地蔵と武左衛門への奉納

――西村善太郎氏に聴く――

愛媛県北宇和鬼北町下鍵山在住
1931（昭和 6）年生れ
インタビュー：2011 年 8 月 23 日、自宅

1.　武左衛門相撲

――六地蔵相撲とか、武左衛門相撲とか言われていますが、8 月 24 日の奉納相撲についてお聞かせ願えませんか？

「武左衛門からいうたら、わしらの子どもの時分からあった。部落でやったりなあ、村の有志の人らが発起人で、力士を集めて、相撲をやりよった。」

――発起人になった有志の人とは、どういう人たちでした？

「発起人いうたら、部落で、今で言う組長さんとか、役員さん。そういう人らが「相撲やろうじゃないか」ということになって、24 日にやるのは、武左衛門の奉納相撲。奉納相撲はだいたい三十三結びで、子どもでも、青年でも、大人でもかまあなんだ。三人消（げ）しから五人消（げ）し、飛びつき五人、少々五人、小五人、中五人、大（おお）五人いうように、段を追ってやりよった。大五人になったら賞金を大分貰いよった。」

――どのくらい？

「その年によって違うけんな。まあ 3 千円か 5 千円、8 千円。昔は 8 千円いうたら大した金やったんよなあ。」

――いつ頃ですか？

「昭和 25、6 年頃かな。」

――三人消しというのは、三人投げた？

「そう、三人転がしたら、三人消し。三人に勝ったらな。」

――小五人というのは？

「小五人というのは、その段階で集めて‥‥。」

――とうことは、五人消しのなかでも、強い人とか、いろいろあって、それらの人を集めた？　大関というのは、なかったんですか？

「五人消しのなかから選んで、役相撲というて、三人を選んで、いまでいう選抜よ。その人らを集めて、奉納相撲で三役という役をやりよった。役相撲という。」

――そのなかで、東西で両方で、大関が出る？

「毎年、大関が出る。豪いやつは毎年、続くこともあるけど、たいがいは毎年変わりよった。」

――五人消しをやるような力士は？

「各部落から選抜して、取らしよった。」

――他所の町や村からも‥‥？

「それは、一般の相撲で来よったんよ。」

―― 一般相撲というのは、役相撲とは別？

「役相撲のなかにも一般の人が入ったりした。なかで強いような奴を選り抜いてやりよった。」

――子ども相撲、青年相撲、大人相撲があって、大人相撲、一般相撲では他町村からも来る？

「そう。強いような人を選抜して、大五人というような取り組みをやった。」

――大五人というのは？

「そのなかでも、まあ 10 人なら 10 人、7 人なら 7 人のなかで、五人抜きをやらす。それで勝ったら、大ボデンと賞金をもらえる。昔いうたら、わしら子ども時分には相撲いうたら日吉村では至る所であったんよ。」

2.　2 つの呼称をもつ相撲行事――武左衛門奉納と六地蔵奉納

――子ども時代というと、戦前ですね？

「そうそう。だいたい、戦前にはこの向こうで、金毘羅相撲いう、高い山でなあ、それがあって、至る所で子ども相撲をやった。」

――戦争中もありました？

「戦争中はなかったなあ。」

――また、戦後復活ですか？

「復活やな。24，5 年からあった。まあ、六地蔵の、作物が不作で、野菜が不作とかで、

野菜が少ないときに奉納相撲をやろうじゃないかと、部落の人がやり始めたのが六地蔵の相撲の発端。昔は日吉には武左衛門いう偉い人がおって、お百姓じゃった。武左衛門相撲という相撲になって、それから今度は六地蔵。」

――武左衛門相撲から六地蔵相撲へ代わった？

「六地蔵相撲はあったんで。あって、そのう‥‥武左衛門相撲をやろうじゃないかということで、武左衛門の相撲になったのよ。」

――それからまた六地蔵相撲になるんですか？

「そうでななしに、もう今は六地蔵の相撲だけ。武左衛門いうたら一緒よな。」

――なるほど、武左衛門相撲であるし、六地蔵相撲でもあるんだけど、今は六地蔵相撲という名前でやっている。それで、戦前は至る所で子ども相撲があった。これは六地蔵相撲とは別？

3. 金毘羅の子ども相撲

「六地蔵相撲とは別。部落の有志の人らが人を集めてなあ。まあ昔のことで、50 人か, 100 人か、200 人かが集まって、やった、やられたじゃ、という勝負事をやりよった。」

――じゃ、部落でやる子ども相撲でも、他部落の子どもたちが参加することもあった？

「それは、ない。まあ、日吉村だけの子どもら。あまり、集まる言うても、他所からは、強い子がおるちゅうたら、来んけんな。で、我こそはと思うような奴だけが集まってやりよったのよ。」

――「金毘羅相撲というのは、子ども相撲だったんですか？

「そう。子ども。まあ、大人も最後にはやりよったけど。青年がやりよったくらい。他所からは来りゃせん。今の六地蔵は、あの、吉田のほうからも宇和島のほうからも、南宇和のほうからも、高校生らが集まって、今の武左衛門・六地蔵相撲には来るけど。野村から来たり。至る所から高校生の強い奴が来る。」

――今もそうですか？

「うん。今も。昔はもう、ここの部落の青年、若い衆らが取りよっただけでなあ。」

――ほかに何か思い出話はありますか？

4. 賞金の魅力

「思い出いうても、昔のことで。奉納相撲いうのは、やっぱり、お百姓の稲作が悪かったり、大きな病気がはやったりするようなあとで、相撲をやろうじゃないか、いう、元気のもとになるような行事をこしらえたわけよ。もとの発端は。」

――賞金とかは？

「それは勝ったときに大(おお)ハナいうて、皆が少しずつ勝った力士にやりよった。まあ別に賞金いうたら、こまいけど、ハナをだいぶ人気力士は貰うてな。そういう嬉しさがあって、勝ったらアレじゃ、いうて一生懸命やりよった。」

――昭和 25，6 年の賞金が 3 千円から 6 千円。それはハナを入れてですか？

「いやいや。大ハナは別。」

――じゃあ、結構な額になりますね？

「そうそう。それで、他所から強い力士が来よった。日吉の武左衛門相撲いうたら、もう、野村の乙亥(おとい)の次に有名やったなあ。」

5. 武左衛門信仰との結びつき

――武左衛門いうたら一揆の指導者ですよね？　そういう意味では男気というか、任侠というようなものを感じました？

「そうじゃなあ。武左衛門いうたら打ち首になったけど、日吉の村の百姓が連れてもどることをしよった。」

――じゃあ、武左衛門という名前でやる相撲には意味がある？

「うん、そうじゃなあ。まあ武左衛門相撲で。六地蔵相撲よりは武左衛門相撲のほうが有名なかったけんな。名前がと通っとるだけに。まあ、六地蔵いうようになったのは、まあ、病気やなにかがはやって、百姓の米や野菜が少ないときに、六地蔵に奉納しようじゃないかということで奉納し始めたのが武左衛門相撲と一緒になったわけよ。」

――やっぱり一緒になることによって、農民魂というか‥‥。

「そうそう。そういう、今で言うファイトが沸いて、皆元気にやり出したんよ。」

――子どもの頃からすでに武左衛門広場でやっ

てました？

「そうそう。あそこで。子どもの頃から武左衛門広場で六地蔵の奉納相撲が。」

――最初は、六地蔵というのは別のところにあって‥‥？

「いや、あすこにあったんよ。地蔵は。お地蔵さんは。堂は出来てなかったけど。それで、あっこへ6人の体を集めて六地蔵ということにしたのよ。で、その横へ今度、武左衛門の記念碑よな、大きいのが建っとるが、それを建てて、部落で、そこで一緒に武左衛門と六地蔵の奉納相撲をやりだしたんよ。」

――じゃあ、最初から広場があり、あすこに六地蔵はあったんですか？

「うん。六地蔵はあそこにあった。大昔は、日向谷（ひゅうがい）と下鍵山の境のほうにあったらしいけど、それはわしらは憶えていない。人の言い伝えだけで。それをあっこに連れて来て、日吉村の六地蔵ということに。下鍵山の六地蔵にしたわけよな。」

――じゃ、広場に六地蔵があって、それから武左衛門の碑が建てられて･･･。

「武左衛門相撲になったんよ。」

6. 武左衛門広場と土俵

――じゃ、土俵は子どもの頃からあすこの広場にありました？

「そうそう。毎年こしらえたけど、いまは屋根をこしらえてな。修理だけしたら、そこでやれるようになったのよ。青年がな。」

――土俵に屋根をつけたのは戦前ですか？

「最近じゃけんな。屋根つけたのは。」

――じゃあ西村さんが子どもの頃､相撲始めた頃には､いまの広場の所に土俵があって、六地蔵は･･･。

「六地蔵はあった。土俵もあって。いまのような立派なものではなしに。」

――じゃ、六地蔵が移って来た頃のことは？

「それは憶えてない。まあ、いよいよ子どもの時分に馬車で持ってきて揚げたという話は聞いたけど。どうやって揚げたのは定かでない。」

――もともと6個の地蔵があって移したのですか。それともいろんな所から集めた？

「六地蔵は日向谷（ひゅうがい）のところから連れてもんたという話しじゃけど。それの横へ、今度、武左衛門の碑を、大きいのを、立派なやつを建てたんよ。」

――今の武左衛門の広場に屋根のついた地蔵堂がありますよね。あれは昭和 10 年建立と書いてあったのだけれど、昭和10年に地蔵堂が出来た？

「建物は六地蔵をすえるためにこしらえたんよ。」

――子どもの頃からありました？

「子どもの頃には、野原で、6 人の地蔵だけで赤いエプロンかけてなあ、で、帽子を着せて、そこにあった。」

――なるほど、そこにまた土俵もあったんですね？

「土俵があった。」

――それからあとに、地蔵を祀る建物ができたんだ。

「その地蔵を連れてもんた段階で、小屋を建てて、六地蔵をすえて、その前の土俵に屋根を建てたのよ。」

――土俵の上に天井をね。建てた。天井を建てたのは昭和の、ずっとあとですよね？

「うん。」

――もう 1 回確認します。六地蔵を移したときには、地蔵をかぶせる建物はなかったんだ。

「野原のなかの六地蔵だったんよ。それではいけんということで、小屋を建てたわけよ。」

――それではまず、6 個のお地蔵さんをあそこの広場に置いておいて、あとから地蔵を入れる建物を建てた。かぶせたということに？

7. 六地蔵と祖霊信仰

「うん。屋根をこしらえてなあ。そのなかに 6 体をすえて、お祭りしだした。で、24 日には下鍵山の亡くなった人の霊を慰める、和尚さんも来て、念仏をやって。」

――じゃあ、24 日にやるというのは、亡くなった人を‥‥。

「そう、霊をなあ。おさめるあれを、そこでやりよったのよ。」

――念仏を唱えて、それから相撲をやったんだ。

「そうそう。」

――じゃあ、そのときは亡くなった人となると、亡くなった人すべての‥‥。

「下鍵山じゃで、それは。まあ 3 百戸くらいじゃろが、そこのなかで死んだ人の霊を 7、8 人か、10 人かぐらいが、和尚さんを呼んで。」

――なるほど。じゃあ、あそこで 7 月 24 日、いまは 8 月の 24 日ですよね。

「旧の 7 月 24 日には六地蔵相撲を、武左衛門相撲をやる前に、下鍵山の先祖の霊を祀ったんだ。」

――とすれば、六地蔵というのは、もともと病気とか、流行病とか、凶作とかをきっかけに農民が元気を取り戻すためにやったと言われるが、もう 1 つは、祖先の霊を慰めるという面もあったんだ。

「そうそう。」

――そうであれば、武左衛門や一揆に参加した祖先の人たちの霊も含めて、という意味がでてきますよね。

「うん。まあ、相撲には関係はないけど、六地蔵に対し、死んだ人の霊を慰めるのは、24 日にやりますらい。そこで。」

――それは、いまも最初にやるわけですか？

「うん。いまも、昔からずっと続いとる。その、死んだ人いうても、下鍵山だけの。で、他部落は他部落で別にやりますけんなあ。」

8. 武左衛門信仰と相撲

――西村さんにとって、武左衛門というのは？ 学校やお父さん、お母さんから教わりました？

「学校では別に教わることはなかったけど、部落の人の優秀な人らがやり始めたことで、やっぱり、子ども心にそれに従ごうて、相撲を取ったりしたんよ。」

――そういう意味では、相撲の名前に武左衛門というのがあるというのは、それなりに、普通のところとは違う意味がある？

「そうそう。意味は深いわいなあ。先祖を祀る。で、相撲を取って、武左衛門に悪事災難をお払いしてもらうような、なあ。」

――そういう意味では、武左衛門に悪事とか災難とかを払ってもらうという気持ちもあった？

「そうそう。お地蔵さんにお頼みするか、お頼みいうても、おいそれと利くわけじゃないけど、やっぱり人間の気持ちよ。奉納しとるという。武左衛門いうのは、やっぱりお百姓さんの一揆で、それだけ心がなあ。で、あそこへ建てただけでもお百姓さんらは心がなごむといような意味もあるし、武左衛門には、いまいう悪事災難を‥‥和尚さんにお願いしてお祀りしてもらうというよな。」

9. 三輪車で遠征相撲

――西村さんは実際に相撲が好きで、やられた？

「ああ、わしゃ、子どもの時分から、親父が相撲が好きで、それこそ、相撲は方々へ三島、梼原（ゆすはら）、それから野村のほうの乙亥（おとい）、そういうものに参加しよった。呼ばれて、なあ。」

――呼ばれて行くんですか？

「そう。何時何時相撲があるが力士を揃えてくれんか、言われたら、わし、車持っとったけんなあ、三輪車の。それに 10 人ほど乗せては行きよった。いまで言う、城川とか、

椿原とか‥‥。」

――お父さんも相撲が好きだった？

「好きやった。」

――三輪車に 10 人ほど乗せて行っていたと言われましたが、どういう人たちですか？四股名とかはもってましたか？

10. 地元の強豪力士

「四股名はあったよ。何人かは四股名があったが‥‥。一方山（いっぽうざん）とか、祇園灘とか、日吉川。名前はいろいろあったけど、四股名の通ったのはそういう人らで、他所の人らはだいぶん四股名をもった人はおったけどな。」

――西村さんも四股名をもっていたんですか？

「私は日吉川いうたりなあ。」

―― 一方山というのはどういう人ですか？

「上鍵山にマンガン鉱山があってな。その鉱山のなかで相撲が強かったけん、一方山という鉱山の名前をとって四股名にした。マンガン鉱山で働きよった。上鍵山で地元の人。馬木国男じゃと思う。国さん、国さんいいよったから。」

――じゃあ、祇園灘は？

「中島いうて、上大野の中島福吉（なかじまふくよし）。」

――ほかに思い出すことは？

「四股名をもった人は、その三人くらいが日吉の人。ほかには、それよりちょっと弱いという人らはだいぶおったけど。」

――思い出す人います？

「日向谷では所々、次から次、毎年代わるけんなあ。」

――化粧回しはなかったんですか？

「化粧回しはない。自分の回しはもったけんな。個人個人がもっとたけん。他の人らは部落の回しを 10 本くらいで、持ち寄って‥‥。」

11. 青年団部落対抗相撲から公民館分館対抗相撲へ

――部落で持ち寄るというと、青年団みたいのがあったんですか？

「そうそう。青年団でやりよった。いまも部落対抗相撲はあるんで。24 日にやる。奉納相撲でなしに、公民館の 6 分館の対抗相撲というて、あるんよ。」

――7 月 24 日にやる？

「そう。」

――それもやっぱり六地蔵相撲の一環としてやっている？

「だいたい、そういうふうなしきたりで。分館対抗相撲というのはだいたい 10 年くらい前からやりだした。1 時からは子どもの奉納相撲をやって、それから小学生、中学生、

高校生になって。いまは一般と高校とが南宇和や野村のほうから相撲取りに来るのよ。来てくれるのよ。」

――部落対抗相撲というのも昔からあって？

「青年団の対抗相撲が結局、分館対抗相撲ということになって。」

――じゃあ、昔からの青年団相撲というのは、やっぱり 7 月 24 日？　奉納相撲と一緒にやっていた？

「そう。奉納相撲で一緒にやりよった。」

12. 地元強豪力士の本業

――あと、たとえば相撲といったら、五穀豊穣とかで秋祭りが多いじゃないですか。ここら辺は秋祭りじゃなくて、盆の相撲が中心ですか？

「下鍵山の武左衛門奉納相撲がすんでから、ほうぼうの秋祭りに相撲があるが、「来てくれんか」いうことで、方々へ行きよったけど、いまはよけない。もう野村だけやけんなあ。」

――じゃあ、武左衛門の相撲が終わったあと、秋祭りの各地の相撲に行ってた。ここでは秋祭りでも大きな相撲はなくて、盆が一番の大きな相撲じゃったということですね。やっぱり、そういうことで、盆に祖先を慰霊するとか、そういう意味がきっと強かったんですね。あとですねえ、何時ごろから青年相撲が衰退していくわけですか？

「もうここ 14、5 年前から青年団の相撲がなくなって、公民館の分館対抗相撲ということになった。昔は消防もやりよったが、消防もなくなって、1 年か 2 年かくらいで。」

――消防相撲は 1、2 年でなくなったんですか？

「それは 1 年か 2 年で、ちょっとやった。1 回か 2 回くらいで消防の相撲はすんだんよ。」

――じゃあ、14、5 年前から青年相撲がだんだんなくなって、分館対抗相撲になっていった、と。

「そう。」

――さっき一方山の話が出たけど、これは鉱山の労働者だったとか。昔の相撲の強い人たちというのは、たとえば祇園灘の中島福吉さんというのは農家ですか？

「農家じゃったけど、宇和島へ出て、魚屋やりよった。中島鮮魚店を。なかなか大(おお)きゅうやりよったが、5，6 年前に死んだ。」

――西村さんも農家でしか？

「昔はやりよった。いまはもう田んぼも何にも作ってないけどなあ。」

――じゃあ、強い力士というのはやっぱり、農家の出身の人が多かった？

「農業だったなあ。やっぱり力がないと相撲とれんけん。」

――それじゃあ、農作業とかで鍛えた、鉱山で鍛えた人たち？

「そうよ、なあ。」

――じゃあ、町場の人というのはそれほど強くなかった？

「町場の人はそりゃあ強い人はおらん。うん。」

13. 奉納相撲の組織と運営

――相撲を組織する人というのは、たとえば相撲大会をやるときは、有志というか、村の組長さんとか、そういう人たちがやろうというかたちで組織を始めると言われましたけど、相撲の世話役とか、後援組織とかはなかったんですか？

「その世話役というのが、今度部落で、下鍵山の部落の区長さん、それから組長さんらで、各家でご寄付を貰うて、寄付を集めて相撲をやりよる。いまは。」

――昔も同じですか、戦前も？

「うん。昔も同じよ。」

――ということは、世話役というのは区とか村とかの役職者？

「役職じゃなしに、区長、組長が世話役。」

――役人じゃなくって、村の世話役とうこと？

「そうそう。」

――じゃあ、相撲の親方とか、行司なんてのは、組織はなかったんですか？

「別にないけど、いまは部落から、まあ目の見える人らが、わしらもやりよったけど、行司をなあ。野村のほうから来てくれて、行司をやるのよ。」

――じゃあ、村のなかには力士の組織とか、行司の組織とか、そういう相撲奉賛会みたいなのはなかった？

「うん。そりゃなあ。豆ご飯を炊いて、力飯というのとお酒を中入相撲という、少々五人がすんだら、それを出して、それが食べとうて、みんなが来てくれて、まあ、おにぎりにして、力飯じゃ、元気になるゾ、いうなことで、みんなに与えて、お酒を一杯飲んで、喜びよった。今の新しい言葉でいうたら、サポーターかなあ。その人らに分け与えよったんよ。」

14. 中入（なかいり）と三役相撲

――力飯や酒は中入に出すんですか？

「少々五人が済んだら、三役相撲という、相撲にする。それが済んだら、中入れで、豆ご飯とお酒を出しよったわけよ。」

――三役相撲が終わってということは、一応相撲が終わって、ということですね？

「いやいや、相撲じゃなしに、その役相撲いうのは、いまの小結、関脇、大関。三役は3人。いうたら6人で相撲を取って、それが終わったら、役相撲がその3人じゃけん、それが終わってから、中入というて‥‥。役相撲が終わって、小豆飯とお酒を出しよったんよ。うん。」

――中入後、何になるんですか？

15. 小五人、中五人、大五人

「中入後、今度は小五人、中五人、大五人の三つが、偉い人らが寄り集まりながら、他所から来た人らを取らしよった。」

――なるほど。じゃあ、役相撲というのは、ここの地元の人がやって‥‥。

「地元でも他所から来たもんでも、やって、「あれとあれと取らしたらどうか」と言うようなことで、まあ役員らが決めて、相撲を取らすわけよ。」

――そうか。それで中入があって、小五人、中五人、大五人がある。で、それで終り？

「うん。大五人がすんだら終り。」

――で、ここで大関を決めるわけ？ 大関は別に決めない？

「いや。大関いうのは、来とる力士のなかで、お前大関やれや、いうことで、うん。」

――小五人とうたら、小中大で各 5 人ずついるわけですか？

「うん。」

――じゃあ、15 人がやるわけだ。いや 5 人抜いたことか？

「少々五人と、中入れになる。それから小五人と、中五人と、大五人になる。で、まあ少々五人はだいたい部落の人らが、6 人抜きをやる。それから小五人やったら、他所から来たもんも、まあ学校で言うたら、何処の学校、此処の学校、野村高校らや、それで決めて、取らす。それからまあ、大五人、それはもう一般相撲になるけんなあ。小五人からは。」

――小五人から一般相撲ね？

「うん。」

――小五人は何番くらいやるの？

「小五人はまあ、5、6 人が集まって、周りうちみたいなもんやけんなあ。」

――みんなでやるわけだ。リーグ戦みたいなもん？

「そうそう、そう。」

――そんなかから中五人いうのも、また決めていくわけ？

「そんなかからも豪い奴は小五人、中五人に入って来るけんなあ。」

――で、大五人とういのは？ だいたい何人くらい？

「大五人はそのなかでいうと、それこそ力士同士が選抜したので取らすけんなあ。五人抜きを。挙がらん場合は、よう抜かん場合は、その賞金を取った人らにズッと分けて、分配するという。じゃけんど、大体挙がるけんのう。一人くらいはずば抜けて強いけんなあ。」

――じゃあ、村の人たちはどうでした。相撲に対しては？

16. 観客の今昔

「はあ、昔と比べたら、ちょっと薄れたけどなあ、まだまだみんな見に来てくれるよ。」

――昔はどんな感じでした？

「昔は木に登っても、行けんくらい人が来よったんよ。いまはテレビが出来て、いろいろなスポーツができて、みな、薄れ気味やけん。」

――そういう意味じゃあ、相撲が一番大きな娯楽だった？

「そう。娯楽はなあ。村で 24 日いうたら、早よう仕事やっといて行こう、いうような百姓が、ほうぼうから出て来よったけんなあ。それも昔は歩いて来よった。いまは車でダァーと来るけど。」

――そういう意味では、今と昔と分けるときの大きな事情というのは、テレビの普及とか‥‥。

「そうそう。だいたいテレビよ。」

――だいたい何年頃ですか、変わったなあ思うのは？

「やっぱり 14、5 年前からじゃろうなあ。」

――じゃあ、比較的新しいですねえ。

「うーん。」

――じゃあ、昭和の時代までは盛んだったんだ。

「うーん。まあ、薄れたのは平成になってから、薄れたけんなあ。」

――ということは西村さんが 60 歳ころまで？

「まあ、54、5 くらいまでは問題なしじゃったのう。盛んじゃった。がいな人じゃった。それこそ、ちょっと、あのー、それぞれに仕事もっとるけん、見に来る人とか、そういう人は限られた人しか来んようになったけんなあ。」

――仕事が変わったということか？

「仕事も変わった。ちょっと相撲ということに薄れたんじゃないかなあ。分館対抗相撲が終わったら、もう、すぐ皆、サーと部落の人らが引き上げるけんなあ。最後まで見るいうような人はちょっと少ないけん。」

――分館対抗で、自分らの相撲が終わったらすぐ引き上げる。

「そうそう、引き上げるけんなあ。」

――今日は貴重なお話し、どうも、ありがとうございました。

―終―

Ⅱ

三十三結びの大取組：ムラの安寧と繁栄の証

――山本喜久夫氏に聴く――

愛媛県北宇和郡鬼北町下鍵山在住
1935（昭和 10）年 10 月生まれ
インタビュー：2012 年 9 月 10 日、自宅

1.　下鍵山における相撲の伝統――奉納相撲と青年団

――六地蔵相撲のことを武左衛門相撲とも言いますね。

「今は旗やなんかも武左衛門奉納相撲になってると思うんじゃけど、10 年ぐらい前じゃなかったろうか。村興しの一環として、武左衛門さんを押し立ててやりよった時分に、私らの若い時分は六地蔵奉納相撲じゃったのが、武左衛門奉納相撲にしなはってね。本来は六地蔵奉納相撲じゃった。15 年くらい前かな、村興しちゅうことで。河野幸男さんが村長じゃった。で、私らの若い時分は、ここの集落の、下鍵山いうんですが、この部落の青年団が全部仕切りをして、1 年間の活動資金なんかを、部落の人に 1 軒づつ寄付をお願いして、やりよったんです。青年団の相撲の上がりで青年団の 1 年間の運営費にしよったんよ。相撲がすんだら、打上げをやったり。」

――青年団以外に、地相撲の組織とかは？

「それはなかったんです。組織はなかったですけど、その時分には、草相撲取るような人らが、いまの西予市で農業とか、普通の仕事をしよる人で、しまいには三島の人で、下のほうの人も来なはったが、その相撲の日には、相撲取ろうかといって来てな。まあビラ

だけは書いて、貼りよったですけど。あまりがいな宣伝はせなんだが、広場の相撲場に寝返りができんほど人が来よった。わし等が二十歳から二十五くらいのときじゃけん、昭和25、6年から30年くらいの頃かな。」

――行司とか、呼び出しとかは？

「私らが知ったころには、行司という人はなし。城川町の自転車屋さんで、岡本という人が、昔し相撲取りじゃったとかで、行司の上手な人がありましてな。私らはおおかた、その人にお願いしよりました。」

――岡本さんという人は、ほんとうの相撲取りですか？

「いや、ちがう。草相撲の相撲取りじゃなかろうか、と思うんじゃけど。4 隅の柱の下へは、昔の相撲の経験者に座ってもろうてなあ。まあ青年団がやりよったし、ここの部落で昔し地相撲で相撲を取りよった人らにも全部、相撲のときには協力してもろうて、問題が起こったときには仕切りをしてもらう人もありましてなあ。そういうことで運営をしよりました。農業したり、林業したり、いろいろしよって、相撲が好きで取りよった人たちやな。」

「小学生のころは皆、取りよった。中学生になると裸になるのが恥ずかしくて、少のうなった。今頃の子はまた取りだしたんじゃけんど。」

――じゃあ、プロとの関係は直接にはなくって？

「そうそう。地元の人らでやりよったです。」

2. 武左衛門広場の相撲場

――武左衛門広場に相撲場がありますね。

「あそこの相撲場は、私らも聞いた話しですけど、私らの爺さんが取りよる頃には、いまの夢産地（地元の特産品の販売センター）のところにありましてな、六地蔵さまが。それから、この辺が全部田んぼじゃったときに、役場を出て国道沿いの四叉路になっとるところがあるでしょ。あそこのところの田んぼのあぜ道へ六地蔵さまを置いとったときに、何年か知らんのやけんど、疫病いうんが流行って、これが六地蔵さまを放置しとるけんいけんのじゃちゅうて、あっこの広場（武左衛門広場）にお堂を建てて移して祀ったんじゃ言うとった。」

――じゃあ、最初は六地蔵は夢産地のところに？

「まだ開発されとらんときに、あっこに。昔はお堂もあったんじゃけど、夢産地が出来

るときに除けてしもうた。あっこの下にあったんじゃ、云う話は聞きました。それも、もう明治時代じゃないかと思うが。大火より前ですな。大火は昭和 10 年ですから、私等生まれとらんときじゃけんな。」

――じゃあ、大火になって六地蔵を移したんじゃなくって？

「大火じゃなくて、疫病で移した言うんじゃから、もっと昔じゃろ。あっこはやっぱり武左衛門広場とは言いよりますけど、それから近年になって、14、5 年前、村長さんが村興し、村興し言い出してから、ずっと下の人がイベントをやりだしてから、武左衛門相撲じゃの言い出したが、本当は六地蔵相撲。」

――じゃあ、六地蔵を武左衛門広場に移したときから、武左衛門奉納相撲と言っていたわけじゃあなくって･･･。

「村興しをやるようになって。やっぱ 14、5 年前からくらい。まあ宣伝の旗のなかには六地蔵と書いたのもあるけんど、武左衛門相撲言う人が多なったけんどな。本当は、私たちの青年団時代は六地蔵奉納相撲やったと思います。」

――この近辺には各地の地相撲の大会に出るような人はいなかったんですか？

「わしらの時分には大会いうもんが、がいになかったけんな。で、小中学校の時代は城川のほうで、相撲がありましたけんな。多かったけん、行きよりました。で、ここらで相撲取りよった人らは皆四股名をもった人が多かったわいな。一宝山とか、それから祇園灘とかな。いまの西予市、城川町にはギョウサンいた。私より 5 つか、10 くらい上の人。ほんと多かった。ほじゃけん、もう日吉のほうが少ないくらいでな。白王山とか。城川にはギョウサンいた。城川のほうが奉納相撲が何箇所もありましたけんね。夜になったら、菊が谷いうところにあったり、窪野の小学校に。アンデラというところもあった。ぎょうさんあった。いまはもう、どっこも無いなってしもうた。」

3. 引き分けで終る奉納相撲

――六地蔵相撲とか、武左衛門相撲ということで、特別な口上はあったんですか？　祖先を追悼したりするような？

「口上はありません。ただ、あのう、取り組みの最後のときに、三役相撲もありましたしな。小結、大関。そして、おしまいは 2 人が、相撲は来年また出ますいうて、引き分けよったな。」

――最後は引き分けですか？

「うん、引き分けよった。私も口上は憶えてないが。で、もう、三役が取るためには、オコワノのおにぎりとかを入れて、酒を一本と、東の大関と関脇、小結が西へ持っていって、東が持ってきてな。それを相撲取さんが食事にしたり、力飯として食べたりな、しよりました。もう、ボデンも五人抜きとか、飛びつきとかいうてな。竹でボデン作るんじゃけんど、いまはおらん。山本決（さだむ）がやりよったが。」

――六地蔵相撲とか、武左衛門相撲といいますが、他の地域と、相撲のやりかたで違い

はありましたか？

「他のところには、準備とかなんかでいったことないんですけど、子どものときに相撲を取りよったくらいで･･･。で、がいに変わったことはないように思いますがな。」

4. 盆行事と奉納相撲

――六地蔵相撲は盆行事としてやるわけでしょ？

「盂蘭盆に。決まってた、それは。」

――祖先を敬うとか、特別なことは？

「盆にはお念仏いうてやりよったけど、盂蘭盆のときは叩かなかったんじゃないか。お念仏いうて･･･。」

――相撲と念仏は関係なかった？

「関係なかった。」

――とくに武左衛門の供養とかは意識したことはなかった？

「そうそう、若い時分は、武左衛門さんというのは、がいに認識はなかったな。で、いま、あっこに武左衛門碑と位牌堂ができとるけんど、10 年くらい前かに、村を活性化するために建てたんよ。あれは。」

――じゃあ、武左衛門追悼という意識はなかった？

「無かったと思います。」

――盆についても？

「盆は、ただ、もう、武左衛門さんと関係なしに、盆踊りということでやりよったけんな。昔はな。」

――じゃあ、やっぱり武左衛門で町おこしをするという、その動き？

「そうそう、そう。それで武左衛門さんが表に出たわけよな。武左衛門行列をやったり、武左衛門の大綱引きじゃいうてするのは、村興しということで、河野幸男村長さんになってからやりなはった。それについては、私より若い者のほうがよう知っとる。若い時分は武左衛門と相撲は関係なかった。まあ、盂蘭盆に相撲があらい、ということで、奉納相撲ということで、青年団が寄付を集めたり、お願いしたり、そして当時の、昔相撲を取った、いまは亡くなったんじゃが、大野先生ちゅうお医者さんが、若い時分には祇園灘ちゅうて、四股名をもって取りよんなはったですけんど。大野友士（ともお）先生という人じゃな。その人のお父さんが大野作太郎という地質学者。」

5. 地相撲が一番盛んだった頃

――じゃあ、相撲を取る人ちゅうのは、金持ちも貧乏人も、小作も関係なかった？

「ああ、関係ない。取ってみようか思うもんが取りよった。」

――階層とか、貧富の差は？

「関係ない。私はそのう、先生が取りよんなはった時分は知りませんけどな。親らと一

緒ぐらいで、知らんのやけんど。」

――じゃ、これはずいぶん前の人ですね？

「そうですな。」

――じゃあ、六地蔵の信仰とか、それは直接には関係ない？

「まあ、正直いうて、私らが六地蔵さまの奉納相撲じゃけんいうて、六地蔵さまにいろいろ、まあ、榊くらいはあげよりましたけんど、それほどのことはなかった。私らが昭和10年生まれで、24、5歳から30歳くらいまで、あっこに入らんくらいお客がありよりましたけんなあ。賑やかなかったけんど。」

――そのころがピークでした？

「そのころがピークじゃなかったろうか。24、5年から30年くらいまでが。まあ、一時はもう、無くなりかけて･･･。」

――いつごろですか、無くなりかけたのは？　東京オリンピックのころ？

「あのころは、ちいと下火になりよったなもし。じゃけんど奉納相撲は三十三結びを取らさないけんちゅうことで、いよいよいけんころには保育所の子らに三十三結びだけ取らしたりな。それから一時は、商工会の青年部というのが一時、5年か6年、引き継いでやりよった。いまはもう、部落の事業としてやりよる。もう青年団もおらんし･･･。」

――部落というのは？

「下鍵山。」

――商工会青年部は5年やった？

「4，5年はやりよりよったな。はっきり憶えてない。」

――青年団が衰退したのは、昭和30年ころ？

「昭和40年ころ。」

6. 三十三結びの相撲大会

――三十三結びちゅうのは、三十三番ということですか？

「そうです。」

――三十三番というのは、何か意味がありますか？

「詳しいことはわかりません。」

――山本さんが30歳ころまでというのは、六地蔵相撲というのは、子ども相撲があって、青年団相撲があって？

「青年団相撲というのが、はじめ若い人が取りよって、だんだん小五人とか、中五人とか、

大五人(おおごにん)とか、大五人が最後じゃったんよな。」

――小五人というのは、どんなことなんですか？　中五人、大五人とどう違うんですか？

「景品が違うた。私らが若い時分は大五人になったらまあ、5 万円。五人勝ちしたら 5 万円くらいのときがあったと思う。それで、景品が第一違うし‥‥。」

――大五人というのは五人抜きのこと？

「そうそう。それに跳びつきとかな。」

――跳びつきというのは、何ですか？

「そのう、仕切りをせずに、勝ったらすぐに跳びかかっていくわけ、次の人が。で、なかには、相撲の好きな人が勝った人にお金を包んだり、いろいろして、で、お前勝ったけん、いうては、お金をなんぼかあげたりな。」

――それは小、中、大五人とは別に跳びつきとういのかあった？

「跳びつきというのも、ときどき、お客さんがやらしたりな。五人抜きとか、3 人勝ちというのも。まあ、跳びつきなんかは、お客さんが、やらせ、やらせという。で、東のほうが勝ったら、西のほうから、だいたい出るように。いちいち四股踏んだりせず。仕切りをやらずに。勝った人には金一封、花札を出しよりなった。だいたい、3 人抜きが多かったろう。」

――小、中、大というのは強さの問題ですか？

「やっぱ、そのう、年齢は関係なしに、強さでしょうなあ。金額も小五人が一番少のうて、大五人が一番上じゃったけん。で、まあ、小五人ぐらいは大五人に出られるような人もあったし、それから、強いような人は大五人に出てくれという、お話をしては･･･。ただいまから小五人の勝負を行ないます。それが、五人あがったら、中五人。それから小々五人。いろいろやるようになった。やったときもあるし、相撲取りが少なかったときは、おしまいころは少のうなってな。」

7. ボデン・お酒・力飯

――これと、三役相撲というのは、どう違うんですか？

「三役相撲いうのは、東からと、西からと、相撲取りを 3 人やな。出して、東が勧進元、勧進元というのは地元。で、西から出して、だいたい相撲がついくらいに取れる人が、3 人出して、取らしよったんよな。」

――三役相撲というのは、地元から 3 名と、他から 3 名、選抜してやらすわけですか？

「そういうふうにして、小結なら小結、関脇なら関脇で一対一、それで大関となるわけ。そして、賞金もなんぼかついて、でボデンもついて。」

――ボデンというのは、ただの飾り？

「ボデンというのは、竹に紙貼るんよな。神官が祓いに使う竹串に白い紙を挟んだもんよ。大小五人、中五人、小結、大関と書いて勝者ごとに与える。」

――それだけ？　あとで賞品に代えてくれるわけではない？

「ない、ない。それが、やっぱ名誉。武左衛門の大五人を取ったとか、中五人をとったとか。小結、関脇、大関の三役相撲には前花（まえはな）というて金一封を両力士に渡し、勝った力士にボデンを渡す。だいたい関脇は割合一対一になったりして、引き分けが多かったけんどな。そして、その人らが取る前じゃったと思うんじゃけんど、そのときにさっき言うた、関取さんらのお食事をオコワとお酒一本とを、東の人が西へ持って行き、西の人が東へ持っていて、それがお食事よな。まあ言うたら。それを子どもらが皆喜んで、力飯、力飯いうては、喜んでな、ほんで食べよった。手のひらに貰うたり、チリ紙に包んで貰らう人もあるし、力飯いうて。」

――その場で配るんだ。観衆も含めて。

「うん。」

――それで、三役同士で、対抗戦をやって、小結対小結、関脇対関脇、大関対大関というように？　で、何勝何敗かで、東の勝ち、西の勝ちというように？

「それは、もう、東の勝ち、西の勝ちというのは、せなんだけんどな。」

――じゃあ、ようするに三役で三番勝負やるわけだ？　勝ち抜き戦はやらない？

「勝ち抜きは絶対ない。たいてい一番勝負じゃなかったかと思うんやけんど。二番じゃったかもしれんが。たいてい一番勝負じゃなかったのかと思う。」

8.「引き分け」で結ぶ奉納行事

――で、最後の相撲では引き分ける？　それは三役相撲が終わったあと？

「そう、三役相撲があって、それから大五人とか小五人取って、大五人の終わったあとに、こっちとこっちから出て、相撲を取って、出るのは誰いうことないけど、もう他の人はだいたい済んどるけん、大五人取ったような人が最後の一番やって、「ゴメイジンニ、ゴメイジンヲ重ネテ･･･コノ一番ハ引分ケテ来年取リ組マシマス」と行司さんが言いよりなって。」

――あと、引き分け勝負をやるわけだ？

「引き分ける。」

――くどいようだけど、小五人、中五人、大五人の前に、三役相撲はあるの？

「たいがい前じゃった。それから、その人らがオコワトお酒を配る。それから、いよいよ本番をやる。それから最後の引き分ける一番がある。」

――弓取り式とかは、やるの？

「ない。引き分け相撲で終り。この前のときの口上は昔の口上と違うが、誰がやりよったかな。近永の鬼北テレビに行けば分かるかもしれん。収録しとるけん。昔は、宇和島のほうからも相撲取りが来るし、ほうぼうから来よって、それから、もういよいよいけんようになりよったころに、愛媛県の高校の相撲大会か、しよったけんど、もうそれが一回きりになったり、高知県の宿毛や野村の高校生らも来とったけんど、高校生で相撲取る子がおらんようになって。」

――最後の一番の引き分けの意味は？

「来年の奉納の、豊作祈願かなんぞで、そうしたんやと思うんやけんど、よう知らん。そこのとこは。」

――それから、最後の引き分けには、伝承というか、言い伝えは。1 つは三十三結びはやらないといけない、と。それから、最後に引き分けの相撲をやる、と。最後に引き分けをやるのは、この地域、どこでもやってたの？

「さあ、私ら他に行ったときは最後までようおらんけん。ここは昔から最後まで組んで、引き分けの相撲をやって、「来年取らします」いうようなことをやりよった。」

――それ以外の伝承は？

「憶えてないですなあ。」

9. 青年団対抗相撲と子ども相撲甚句

――相撲との関係で先祖供養はない？

「盂蘭盆には、念仏をやりよったあとに、やりよったかも知れんけんど･･･。六地蔵相撲には関係ないと思う。で、小学生らも、いよいよ相撲をとらんようになったり、いけんときには、いまの保育所の子どもらに三十三結びを取らしよった。引き分け相撲と三十三結び、あとは、子どもらと青年団をを取らせたら、少々五人やったり、おしまいは大五人をやって、これが終り。」

――青年団対抗の相撲というのは？

「6、7 年前までは公民館活動で、分館対抗をやった。昭和の 30 年ころは、対抗相撲というのはやる必要はない。相撲取りさんが近隣から来るけん、力士を揃える必要がなかった。ないなったころに、いけん、いけん、いうことで分館対抗。うちのいまの息子らも、弟もみんな、しようなしに一部落から、5 部落あるところから、5 人くらいづつ出して、取らしよったけんな。最近まで。そいで、一時は、私が若い頃は、一時この日吉村でちょっと相撲が盛んになって、乙亥相撲にも四,五人連れて行ったこともある。」

――上鍵山に子どもの相撲甚句。これと六地蔵相撲とは関係ない？

「関係ないです。あれは鹿踊り。上鍵山のは鹿踊り。」

――相撲甚句は？

「上鍵山は上鍵山でやりよらい。相撲甚句は。六地蔵とは、たいてい関係ないと思う。昔は、あれは全然やりよったんやろうが、消えてしまい、20 年前ぐらいに復活した。村興しやる時分に、ちいとづつやり始めて、上鍵山に子どもがないけん、ということで、下鍵

山の子どもも向こうへ行ったりしてやりよった。六地蔵相撲でやる子どもの相撲とは関係ないと思います。」

10. 武左衛門のわらべ歌

――この地域の昔話しで相撲のことが結構あるんだけれど、ご存知ですか？

「ないです。」

――わらべ歌で、武左衛門のわらべ歌があるのは？

「知りません。」

――ここは農民運動とか、革新的な運動は盛んだったんですか？

「そうじゃろ、なし。あっこの明星ケ丘いうのは、与謝野晶子か、あの人が命名した所だ言うことで、愛媛県でもメーデー発祥の地じゃ言うてるし。じゃけん、革新的なとこじゃったんかも知れません。で、あのう、井谷正命さんは初代の村長さんじゃけんど、その人の息子さんに正吉さんか、あのう、社会党から代議士に出とりなはったな。あの人らが私らが子どものおりに、芝居の前進座かしらん、芝居を連れて来たりな。そがいなことをしよりなさったり、まあ、やっぱメーデー発祥の地じゃいうけん、革新的なんかも知れません。」

――武左衛門による村興しというのもありますし‥‥。

「まあ、六地蔵さんから自然に武左衛門さんになったんよ、相撲は。」

――わかりました。長い間、どうもありがとうございました。非常に参考になりました。

―終―

Ⅲ

引き分けで再会を誓う結びの一番

――山本 決（さだむ） 氏に聴く――

愛媛県北宇和郡鬼北町下鍵山在住
1943（昭和 18）年生まれ
インタビュー：2012 年 9 月 11 日、日吉公民館

1. 下鍵山の奉納相撲――六地蔵と武左衛門

――8 月 23 日に下鍵山で開催される相撲には、六地蔵相撲と武左衛門相撲という 2 つの呼称がありますが、両者の関係を教えてください。

「本来は六地蔵相撲いうのが本当の名称なんですが、武左衛門の名前が出だしたのは、いまから 20 年あまり前になりますかね。ちょうど日吉村に河野という村長さんがおられたんですが、その方が相撲が好きな方で、町村対抗とかをやってみようじゃないか、ということになりまして、そのときに、六地蔵というよりは武左衛門の名称をつけたほうが、近隣には聞こえがいいと、そういうことになって武左衛門の名前をそこへ乗っけたようなことになったという記憶をしとるんです。この地区の相撲そのものは、六地蔵奉納相撲いうことで、昔からやって来とるんで、いま言いましたように、河野村長さんがおられたころに、ふるさと祭りというイベントを起こしまして、それと一緒にということで、学校のグラウンドに特設土俵を作ってやるように話しにはなったんですけど、この地区の本来の相撲は武左衛門に対する奉納相撲というよりも、六地蔵さんの前の土俵でやるのが本当じゃあ、ということで、従来どおりの場所でやると、そういういきさつもあったんです。で、

最近、若い人は全然そういうことを知らずに、ポスターにも武左衛門の名を使うことも年によってはあるようですけど、本来はやっぱり六地蔵さんに対する奉納というのが昔からやって来とったもんで、この六地蔵さんというのは、いまの夢産地に祀っていたんで、そこに土俵を作ってずっと昔はやりよったみたいですが、町の中心に交差点があるでしょう、そこに六地蔵を移して、いうようなこともあったらしいですが、それを現在のところへまた移して、そして、そこで奉納相撲をやるようになった歴史があるようです。そんなことで、武左衛門さんを頭に載せたのは最近の話しです。最近のこの地区の若い人はみんな、知っとりなはらんけんど。」

――下鍵山以外にも、六地蔵に奉納する相撲というのはあるんですか？

「この地域で、5 つ地区があるんですが、そのなかで上鍵山とか、父野川（ちちのかわ）ですか、ほうぼうの地区でやりよったんですが、六地蔵に対する奉納いうのは、ここだけじゃないでしょうか。上鍵山のほうではお寺でやっておりましたし、で、いまでも日向谷（ひゅがい）の愛宕さまいう氏神がありますが、六地蔵の相撲というのは下鍵山だけです。」

2.「引き分け」て勝負は来年に持ち越し

――最後に引き分けの相撲をやる？

「口上はいろいろ人によって変わってきてるんですよ。口上は変わってきとるんですけど、結局最後に、取組みが始まると「待った」をかけて、言うのは、両方とも名力士、強い力士なんで勝負がつかん、ということで、この勝負はまた来年まで持ち越しますよということで、来年につなげていく意味あいをもってそこで止める、というような意味での口上を述べられるんじゃけど、その口上も、きちっと録音したり、文章で残したりしたものでないので、たまたま、その人の思いつきで言われよるみたいなんで、昔からずっと続いとる口上とは違うみたいです。まあ、内容、意味については、今年の相撲を来年につなげると、いうようなことで、「待った」をかけると、だから来年につなぐことが目的みたいですけど。来年につなげるために一番だけ残す、と。」

――これは六地蔵相撲だけですか、そういうことをやるのは？ どこの地域の相撲も、日吉村以外の地域も、この南予近辺ではどこでも？

「ここだけじゃ、ないですか。いま一番盛んなのは、野村の乙亥いうところが一番盛んなんですけど、私もそこらへんあまり詳しいことは知らんのですけど、多分、そういう止め方するのはここだけじゃないでしょうか。ほかにあるかも分からんけど。私もあまり分かりません。」

――最後の来年に残す相撲について、何か名称はあるんですか？　結びの一番とか？

「それも、そのときによって違うんじゃけど。結んでしまうわけじゃないけん、残していくわけじゃけん。止めたあとに、口上を述べるんじゃけど、口上そのものがその時々の人によって変わってきとるけん。」

――口上やる人は誰か決まってるんですか？

「相撲の好きな、世話をする人が、まあ悪い言葉で言やあ、相撲に関していろいろ仕切りをしたかったり、というような人がやんなはる。それがあるんで、毎年変わるので、続いていかん。ですから、私らは、もう、相撲にかかわってから 50 年余りになるんですが、その時その時の思いつきでやられるのが嫌で、最近はもう 10 何年行かんのやけど。」

3. 番付と取組

――プログラムは、どういうふうになるんですか？

「昔は力士が多かったんで、相撲の取り組みの名称も、一番最後に取らすのが「大五人」勝ち、それからその前が「中」、そしで「小五人」とか「小々五人」とかいう形でずうーとやりよったんですが。「小々」が先だったと思います。そして、その前に、「五人勝ち」とか、「跳びつき五人」とか、「跳びつき」いうのは、土俵のどこからでも勝った人にかかっていってもかまん、いうのが「跳びつき」いうんです。それらの相撲をやって、そのなかで 2～3 人の方が力士にランク付けしていく、といういような形で、「小五人」なり、「小々五人」なり、取組みを作っていくようなことをずうとやりよったんですけど、最近は力士が少ないんで、そこまではできんので、もう 10 年ばかり前からはそういうやり方はせずに、自由にかまん人は取って下さいというてやりよりますんで、賞金はそのころは相撲のランクによって変えていきよったんですが、最近はもうそういう取り組みを作るどころではない。もう力士が少ないんで、運営が大変になっとるみたいです。」

――その場合、ランク付けはどのようにして？

「お前は強いから「小五人」には出るなと。あとへ残っとけと。2～3 人、仕切りやさんがおって、ランクをつけていました。それ以外にも、昔は 24 日の六地蔵奉納相撲の翌日に、「裏付け」いうことで、翌日もやりよったんですよ。力士が多いころは。24 日の相撲は賞金が、翌日の相撲はこの近辺で商店街の人らが品物を持ち寄って、相撲を楽しむ、それくらい力士も多かったですけんね。私が子ども時代、親から小遣いもらえんけん、その相撲に勝って、賞金を貰うことが小遣いの源じゃったんですけどね。」

――「小五人」とか、「中五人」とかというのは、「五人抜き」ということですか？

「そうです。」

4. 三役相撲

――あと、大関相撲とか、関脇相撲とかは？

「あれは中入いうことで、大相撲にもありますね、中入が。そういう形で、三役相撲い

うのをやりよったんですが、小結、関脇、大関を東西に作って、東西に酒一本と力飯いうて、赤飯を炊いてお握りにして、それを三役という、名指しされた 3 人の力士たちが西に置いたものは力士が東へもって行く、それで東の人が西へもって行く。で、東西入れ代えて、応援に来てくれた人へ振舞うことをやりよったんですが、最近は、それもやらんみたいです。その握り飯いうのは、力飯いうて、妊娠した人は元気な赤ちゃんを、子どもは健康で育つことを願って、子どもに食べさすとかいうようなこともやりよりました。もう今は三役相撲なんかはできんし、力飯とかいうのも準備してないと思います。」

――三役相撲というのは「小」、「中」、「大五人」の前ですか、後ですか？

「三役相撲も賞金つけてやるんです。取り組みはやるんですよ。「大五人」、「中五人」、「小五人」より前ですね。三役相撲をやったあとに。「小五人」や「中五人」、「大五人」がメインなので、その相撲が取組みの最後になりますね。」

――最後に「大五人」をやったあと、引き分けの相撲をやるんですね？

「そうです、そうです。一番最後になります。」

――それはどれくらいのレベルの力士がやるんですか？　大関がやるんですか？

「それはもう適当に、力士も最後は疲れて、土俵に上がるのが嫌になって、回し解く人が多いんで、残った人のなかで選んでやりよりました。」

――どの相撲取りがやってもいいわけですか？

「そうです、そうです。特定の力士がやらにゃいかんという決まりは無かったと思います。」

5. 山本決さんの相撲体験

――山本さんの相撲体験について。子ども時代から相撲に参加していたわけですか？

「私も体がこまいんじゃけど、結婚するまで取りよりました。24 の歳か。その頃までは小遣い稼ぎをやらせて貰いよった。もう楽しみ言うたら、相撲と亥の子くらいしかなかったですけん。この辺は青年団が今もあるかどうか、知らんのやけど、青年団ごろからずっと裏方やりよったんで、土俵作ったりとか、昔は力士も多いし、近隣の町村からだいぶお客さんも 24 日の日に集まりよったんで、桟敷つくって、見てもらいよったんじゃけど、最後にやったのが、高校の国体予選をここでやったときですよ。それが桟敷作った最後じゃったと思うんですけど。それくらい相撲を熱心に、盛んにやりよりよった。」

――高校の国体予選やったのは、だいたい、いつ頃ですか？

「もう 40 年くらい前じゃろうか。私が昭和 18 年生れです。で、昭和 10 年にここ全部

焼けたんですよ。その年に相撲がなくて、それで今度、私が 23 の年じゃけん、40 年か、41 年ころに赤痢が流行ったことがあるんですよ。その年か、その前の年に相撲がなかって、それから 10 年あとくらいかな、当時の区の区長さんされよった方が相撲も大変じゃけんやめようということを言い出しなはって、それで、いま言う昭和 10 年の火事があったときも相撲はなかった、赤痢が流行ったときも相撲がなかった、それで、もし区長さんが六地蔵の奉納相撲をやめて、災害なり、疫病がはやるなり、ということがあったときはどうするのですか言うたら、それはやらないけんなあと言うて、結局ようやめなんだというような経緯があるんです。もう最近はそういうこと関係なしに、力士がおらんので、世話する人も、区（部落）が主催なのか、役場、公民館が主催なのか、それすら分からんようになっとる。いまの公民館の主事の山本雄大君なんか、そういうこと知らずに手伝わされとるから大変でしょう。多分。私らも自分の経験と、先輩らから聴いた話しで、実際に歴史を調べてどうのこうの言うことまではしたもんじゃないですから、受け止め方も、考え方も違う人がおりなはると思うんじゃけど。この地域の人も、六地蔵相撲の詳しいことはほとんど知らんでしょう。」

6. 三十三結びの取組――地蔵信仰か観音信仰か

――そういえば、三十三結びのことをちょっと･･･。三十三番ということの理由は？

「三十三結びについては、いまの六地蔵さんが、お盆に地域の先祖とか、前の年の 8 月から今年の 7 月までに亡くなった方の供養、それをお盆にやるんですけど、六地蔵の奉納相撲のときには、盂蘭盆いうて 24 日の日にやりますけど、結局、六地蔵さんというのは三十三と直接は関係なくって、六地蔵さんじゃなしに本当は七地蔵さんが本当になるんじゃけど、六地蔵のうちの一体が 7 日間、で、7 日、7 日、7 日で 7 つあって 7×7＝49 の法要、供養をこの辺ではやるんですよ。それで、7 つめのお地蔵さんについては、お地蔵さんじゃなくって、お釈迦様がそこで供養をして仏様になるんじゃいうようなことで、あれ 6 体のお地蔵さんがあるんですけど、その三十三結びちゅうのは、西日本のほうにとくに多いらしいんですけど、三十三観音いうて、珍しい、目出度いほうの意味で観音様が三十三体あるそうなんですが、それを三十三にひっかけて、三十三結びの相撲をお地蔵さんに奉納するちゅう謂れが昔から続けてきとるみたいですが、だから三十三の数値と六地蔵さんの直接の結びつきはないみたいです。あのう、お盆の日は供養のほうで、24 日の相撲のほうは念仏をやるんですけど、六地蔵さんに対する念仏供養というのをやるんです。24 日の日に。そのあとの三十三結びの相撲いうのは、相撲にも東西南北があって、そこに大相撲でもそうですけど、房がそれぞれありますよね。あれは四季を表わすのと、それからもう一つの意味は竜とか虎とか、亀とか、鳳凰、そういうような意味があって、これらはたいてい全国どこでも一緒じゃろと思うんやけど、結局、縁起のいいものなんでしょ。昇り竜とか、亀とか、鳳凰というのは。それを東西南北に分けてやるようなことで、24 日は結局、相撲を奉納するということは、その地域の安全とか、ようするに目出度い意味でやる

んじゃと思うんですが。」

――秋祭りとかはそうですよね。

「はい、はい。」

7. 盆供養の奉納相撲

――それがなぜ盆にやるのかという。火災があったから、というの野村の相撲など、そうらしいですが。だいたい、普通だと、相撲は秋のほうが盆よりも一般的ですね。この地蔵というのは、祖先の供養とか、盆行事と関係あるのかなあ、と思ってて･･･。

「それがいま言いましたように、そっちの方に三十三という数字を結びつけたようですけどね。」

――なるほど、そういう意味で行くと、盆の供養ということから三十三の結びが連なって･･･。そういえば、この近所ではどこでも相撲は三十三結びなんですよね。

「はい。それもいろんな説があるんじゃろと思うんです。さっき言いましたように。自分らがいろいろ教えてもろうた先輩から聞いて、いうことぐらいですので、別に私らも分からんですけど。」

――念仏供養と三十三結びの結びつきは、難しいところがありますが･･･なるほど。この地域では、相撲はどこも夏ですか？

「夏が多いですな。どこの地区でも。いまはもうほとんどないですけど。ちょうど私ら子どものころ、夏休みの１つの楽しみで、方々へ。で、竹に御幣みたいのを挿んで、賞金と一緒にもらうのが楽しみで、夏休みの大きな楽しみの１つじゃったですが、この辺は秋とかじゃなしに、夏の行事としてやることが多かったです。秋にはこの辺では相撲大会はない。野村が 11 月。11 月の九州場所済んだあとに野村がやりますけど。ほかには、ほとんどが夏じゃと思います。ですから、六地蔵の奉納相撲より、名称も 24 日の相撲いうことで近隣の人らに知られとるくらいじゃから。」

8. 六地蔵堂と武左衛門広場

――それにしても、地域の古いことを良くご存知ですね。どのようにしてお知りになったんですか？

「いまの夢産地のところで、相撲をやりよったとか、そこの四つ角があったところでも。もうみな死んで亡くなられたけれど、私のとこ、ちょうど夢産地の近所なんですけど、そこらの爺ちゃんから聞いたり、14、5 年前に私もちょうど区長をやらして貰ろうたんですが、その区

長の先輩とか、昔の悪いことをしたら怒られよった爺さん、婆さんとか、そがいな人らにいろんな話しを教わりました。いまの若い人はそんなことに興味が無い。広場にお宮ができて、道ができて、そこに銀杏の木があったんですよ、その銀杏の木は夢産地のところで相撲を取りよったころ、埋まっとった銀杏を、そこの交差点の右のところにあるスーパーに西浦さんという人がおられて、その人らが昔のことで、重機も何にもないいんで、寄り集まって夢産地のとこの地蔵を祀ってあったとこの傍にあった銀杏の木を皆が担い棒で担いで移植して、それが大きくなったんです。そしたら、最近の若い人は道路の拡張工事するいうて簡単に切らしてしもうて、その前に武左衛門の供養堂建てるけん木を切らしてくれ言う話しが出て、それは由緒ある木じゃけん切らしたらいけん言うて、私らが地区でその世話をさして貰いよるときには切らさなんだんです。でも、いまの若い人は、そんなことは知らんけん、道路拡張工事で簡単に切らしてしもうて。そういう経緯を、昔のおっちゃん、おばちゃん、爺ちゃん、婆ちゃんから聞いとるような子どもは、あまりない。」

――その銀杏は、一度、四つ辻に植えて、それから武左衛門広場に？

「いや、四つ辻には狭くて植えられんので、夢産地から直接、もって来たそうです。それが樹齢何年くらいになっていたのか、知らんけんど。二本あったのかな。」

――夢産地のところに六地蔵もあったんですね？

「そう。」

――それが四つ辻のところに移されて、それが広場に･･･？

「それが今度、四つ辻のところから、広場に移転して。」

――それは何時の頃ですか？

「この町が焼けたときには、もう移っとんたんじゃろと思う。」

――貴重なお話しです。今日はどうもありがとうございました。地蔵信仰と観音信仰の関係とか、祝い事と供養の関係とか、参考になることがたくさんありました。本当にありがとうございました。

「いえ、お役に立ちますか。最近、こういう話をする人がいないから、楽しかったです。」

―完―

Ⅳ

仕事で鍛え、相撲で試す：賞金と名誉を競う素人力士

――山口孝氏に聴く――

愛媛県北宇和郡鬼北町上鍵山在住
1936（昭和 11）年 12 月 4 日生まれ
インタビュー：2011 年 8 月 23 日、自宅

1. 日吉の地相撲

――相撲の思いでとかを、お伺いしたいと思うんですが。

「昔は娯楽がなかったけんなあ。もう草相撲しかなかったけん。若い時分は。唯一の娯楽じゃってなあ。相撲はこの日吉村でも、各分館対抗相撲いうてなあ。各部落から 5 人づつ選手を出して、いまの武左衛門広場というところで、毎年、対抗相撲よ。当時、青年団がだいぶいたけんなあ。1 部落に 30 人から 40 人、青年団がおった。全部、炊き出しでなあ。応援もものすごく大きいし、1 年に 1 回はお祭りよ。相撲祭りよなあ。」

――それは武左衛門広場で？

「そう、武左衛門広場で大会。練習は各部落で。」

――いつ頃の話ですか？

「もう 50 年前や。わしの二十歳時分やけんなあ。それこそ優勝賭けて、必死の猛練習やって。自分はおかげで、部落は上鍵山いうんやけど、団体、個人ともに優勝させてもろうてなあ。表彰受ける写真があるんやけど。これが個人優勝の表彰を受ける写真。」

――これは 22 歳くらい。そのときは、もう家族で大祝い？

「うん。もちろんそう。婦人部も含めてお祝いよなあ。集会場で。うん。ドンチャン騒ぎよ。」

――青年団の婦人部も入って？

「そうそう、そう。」

――青年団というのは盛んだったんですか？

「盛んだったなあ。人もおったしなあ。」

2. 子どもの頃から野良で鍛えた逞しいからだ

――写真を見ると、筋骨隆々としていますねえ。こういうからだは何で鍛えたんですか？

「もう食べ物はないし。いまのように肉や牛乳や魚はなかったけん。いわゆる山菜。まあ、川魚（かわさかな）はおもになあ、もう買うてはよう食わんのやけん。昔はみな貧乏しよったけん。まあ川魚を取ってなあ。川魚が豊富にあったけんなあ。ウナギとかなあ。昔はおったのよ。それを力士やけん、余分に食べさせてもろうて。田んぼなんかに、日が暮れてから行ったら、よう肥えたウナギが泳いで出てなあ。取っちまってなあ。それこそ栄養源よ。」

――あとは普段の農作業で鍛えたんですか？

「うんうん、農作業。」

――農業をやっていて、こんなに逞しいからだになるんですか？

「鍛えとっちゃたけんなあ。もう小学校 2 年生時分から、昔は燃料はみな木炭やったから。負いこを背負て、1 俵につき 3 円か 2 円もろうてなあ、山から道路まで担ぎ出すんよなあ。子ども時分から鍛えちょったから。昔は。今とは全然違うけんなあ。毎日野良仕事。小さい頃から鍛えちょったから、今の子どもとは全然違わいなあ。」

――農業というと、作っていたのは米？

「米、麦なあ。そして養蚕よ、蚕なあ。唯一の現金収入は蚕じゃったけんなあ。それが中国に押されて、全滅したけど。生糸がなあ。子どものときから、みんな田んぼに出されたからなあ。」

――木炭を担いで運搬するというのは‥‥？

「今で言うたらアルバイトよなあ。」

――じゃあ、木炭の製造も盛んだったんですか？

「もちろん、そう。ほうぼうで全員やりよった。全戸、木炭も焼くようになったからなあ。学校からもんたらすぐに。1表2円から5円くらい貰うてな。」

3. 相撲で賞金を稼ぐ若者たち

――そうとう鍛えられますねえ。相撲と他には何かやられました？

「まあ、相撲くらいじゃったけどなあ。時期になったら、何処の神社にも、お寺にも、どこでも相撲大会があった。宮相撲言うてなあ。そこへ回しもって行って、僅かな賞金じゃけど、賞金稼ぎみたいになあ。五人あげたらなんぼということで。お金がもらえよったけん。毎晩のように自転車で行った。もちろん車ないんじゃけん。遠いとこまで行ってなあ。あらゆる所にあったけんなあ、宮相撲いうて、うん。」

――ここは大日さま（医王寺）の相撲という？

「そうそう。あすこの森のなかに大日様があってなあ。小さな社が、あるんじゃけど。8月の19日に、毎年なあ、そこでも相撲やりよった。各村からなあ、寄ってなあ。「大五人」、「小五人」、「中五人」ちゅうて、段階があって。大関にはわしらはようなんじゃったけど。今の関脇ぐらいかな。」

――武左衛門相撲ほどは有名じゃなかった？

「有名ではない。武左衛門相撲いうたら、この界隈じゃあ最高じゃったけんなあ。野村の乙亥の次くらいじゃったけん。乙亥には今でも東京相撲が来るんじゃけど。昔の武左衛門相撲いうたら、多くの力士が他所から来て、泊まってなあ。それは、とてもじゃないが凄かってなあ。観衆もあの広場に入れんくらい居ったけんなあ。観衆がなあ。お客さんが。あそこに桜の木と階段があるんじゃけど、桜の木に登ったり、階段がずうっとお客さんがなあ。びっしりの人でなあ。年に1回の24日の相撲ちゅうて。ほかに娯楽が無いけんなあ。唯一の娯楽で、露天商がずらっと軒並べてなあ。ワイな騒動よ。」

4. 宮相撲と青年団相撲

――青年団対抗とは別に、武左衛門相撲があったんですか？

「全然別個よ。これは大会じゃけんなあ。武左衛門相撲いうやつは、もう景品の取り合いじゃけんなあ。これは試合じゃけんなあ。全然意味が違う。中身がなあ。武左衛門は各方面からなあ、関取が来てなあ、東京相撲に入っていいくらいの強い人が来てなあ。泊り込んでなあ。」

――じゃあ、分館対抗以前は何と言ったんですか？　青年団対抗？

「そうそう。青年団対抗と武左衛門相撲とは別個のもの。全然別個のもの。中身が違わいなあ。青年団は試合じゃけんなあ。スポーツじゃけんなあ。けど武左衛門相撲はもう、

セミプロが来る、いわゆる賞品稼ぎじゃけんなあ。」
――じゃあ、青年団対抗の場合はアマチュアスポーツ？
「うん。景品はない。優勝カップかトロフィー。」
――じゃあ、アマチュア相撲とセミプロの相撲の違いのようなものですか？
「そうそう。」
――庶民の娯楽としての相撲と、青年団教育の一環としての相撲との違い？
「そうそう。」
――他の村でやっている相撲大会で、賞品や花を貰って帰ることは？　小遣いを稼ぐとか？
「各寺社でやるやつは賞品がある。」
――じゃあ、武左衛門相撲に出る力士にちょんまげ結うた力士はいました？
「いやあ。プロは入れん。東京のプロは。あれは野村の乙亥だけじゃけん。いまでもプロが入ってやれるのは。全国でもあっこだけじゃけんなあ。ほかはもうプロは一切、出ん。ただ、プロに近い、力のある力士はもちろん来たけど。本物のプロは、協会も来らしてくれんしなあ。やらしてもらえんかった。」

5. お祭り騒ぎの相撲大会

――あと、何か武左衛門相撲で思い出すことは？
「8 月 24 日よなあ。その辺の子どもが正月みたいに来るの楽しみにして、指おり数えて待ったものよ、みんな。幟が立ってなあ。年にいっぺんぐらいやけど、それが楽しみで。娯楽がないんけんなあ。」
――子どもも大人も、みな？
「うん。みなこぞってなあ。」
――婦人とか、女子は？
「見物はもちろん女子もなあ。男女半々くらい。」
――部落の出身の人たちは青年団の対抗相撲にも出るし、武左衛門相撲と両方に出ることもある？
「もちろん、両方に出た。私ももちろん両方に出ましたよ。そのために毎日練習しよったけん。その日を目標にして。甲子園大会みたいなものよ。」
――相撲としては別じゃけど、参加者としては両方に出る？
「そうそう。力士やけんなあ、一応なあ。」
――みなさんが楽しみにしてたんだ、この日を。
「そう。ものすごい楽しみになあ。うーん。」
――お父さんやお母さんも含めて？
「そうそう、みないたよ。こぞって、なあ。家族がこぞって。」
――山口さんとこの家族ってのは、相撲好きの一家だったんですか？

「好きではあったなあ。わしの長男が全国大会、今のインターハイよ。あれに出てなあ。愛媛県代表で。相撲部で。」

――野村高校の相撲部で？

「野村が一番強いんやけど、その野村を倒して、愛媛県一番になって。インターハイに行ったんよ。わしの長男が。だいたい、血引くけんなあ。格闘技の強いとこは。ずっと。」

――高校は、何という高校？

「吉田高校よ。はじめて行ってなあ。もう、野村が断然強かったけん。」

6. 一揆の指導者・武左衛門への思いを込めて

――武左衛門相撲は六地蔵相撲ともいう？

「そうそう。通称は六地蔵相撲よなあ。三十三結びはどうしたっちやらにゃいけん。台風があろうが。昔からの謂われで。決まっちょるんよ。三十三番は絶対やらんといけんちゅうてなあ。」

――武左衛門相撲と六地蔵相撲には、取り方とかで違いはありますか？

「全く、ついじゃけどなあ。呼び方が二通りあるだけで。本当は六地蔵というのが本当の呼び名じゃけど。武左衛門がいい言うもんじゃけん、みな武左衛門相撲いいよるけどな。武左衛門の方が言いやすいし、有名なわいなあ。武左衛門は農民一揆の代表的なヒーローやけんなあ。もう武左衛門さまいうたら日吉の代名詞みたいなもんであな。」

――じゃあ、やっぱり武左衛門というようなことを意識しましたか、相撲で？

「相撲取ってるときはそんなもの意識はせんけど。イベントはもちろん武左衛門さまでなあ。手を合わして、みんな子どもの時分から武左衛門さま、武左衛門さま、言うて。武左衛門さまいうたら神さまやったなあ。昔からわしらは、崇拝しよってなあ、小さいときから。農民のために犠牲になって、打ち首になったけんなあ。」

――そういう意味でも武左衛門相撲というのは意義があったわけですねえ。

そうそう。武左衛門を偲ぶためにもなあ。大きな意味があったわけよ。うん。」

7. 大日さまの相撲大会

――大日さま（医王寺）の相撲というのは？

「大日様というのはこの部落の鎮守でなあ。しかし、相撲取りは全部寄って来るんよ。で、賞金稼ぎよなあ。うん。これは賞金がついとっちゃた。武左衛門とついで。各段に分かれて賞金がついとっちゃたけんなあ。賞金稼ぎよ。ここは三十三結びはやらん。あれは武左衛門だけよ。」

――大日さまの相撲も、「小五人」とか、「大五人」とか、あった？

「そうそう。上になるほど金額が大きいわいなあ。」

――大日さまの相撲は？

「8 月 19 日。いまは無くなった。もう 10 年も 20 年もなるでなあ。もう、田舎が段々だんだん寂れっちまって、力士がおらんようになったんよ。部落も何もできんようなって、自然に消滅したんよ。以前は相撲しか娯楽がなかったけん、宮相撲が集中的に賑おうたんよなあ。」

――大日さまの相撲などは、どういう人が組織したんですか？

「上鍵山の部落、いまは区になっとるが、区が中心になってみんなが寄付あつめてなあ。で、世話をするのは青年団じゃったんよ。青年団が土俵作りなんかからなあ。お金は一般から、寄付でなあ。ボデン作って、力飯炊いて。これは婦人部でやりよった。男女合わせて三十名から四十名おった。」

――行司とか呼び出しとかは？

「本物はよう雇わんけん、田舎の器用な人がおったけんなあ。岡本匠さん言うて、行司専門の人がおったんじゃが。これ雇うてなあ。後継者がそこの城川町の岡本自動車をやりよるけど。そこの親父さんが名人じゃってなあ。もう亡くなられた。行司の名人じゃってなあ。息子が岡本忠いうて、国体の全国大会で個人優勝した。相撲一家よなあ。こんまい時から座敷で相撲を仕込んで。松山の自衛隊の教官やりよったけど。いま退官したけどなあ。松山の自衛隊に相撲部があったけん。そいつも相撲部の先生やってなあ。松山に住んどる。わしより年が 1 つ上じゃったかしら。」

8. 上鍵山の名力士

――大日さまの相撲というのは盆行事ですか？

「そう。そう。原則として 19 日は絶対に変わらんのよ。」

――この地区は上鍵山ですね。上鍵山で有名な力士は？

「そこの馬木（うまき）さん。四股名を一宝山（いっぽうざん）ちゅうてなあ。プロ級で、ほうぼうに回しを持っては賞金稼ぎに行きなってなあ。四股名は一宝山。一宝山という、この奥にマンガンの鉱山があったんよ。わしなんか、そこに全部勤めよったけんどな。40～50 人。全部手彫りでなあ。一宝鉱山という会社で、マンガンの山。そこの会社の名をとって一方山。社長が回しを作ってくれたんよ。名前もつけてもろてなあ。もう八十くらいかな。

農家で、一方鉱山に勤めよった。ほとんど農家だけで飯が食えんけん、みな一宝鉱山へ働きに行きよった。男も女も。百姓だけじゃ食えなんだからな。」

――じゃあ結構、力つきますよね。ここの青年たちも鉱山で働いていた？

「そうそう。」

――だから逞しいんですね？　小さいときから木炭担いで、農作業やったり、鉱山で働いて。

「うん。肉体労働しよるけん、力は強かった。」

――馬木さん以外に、他の大会に出て賞金稼ぎをしよった人はおりません？

まあ、馬木さんぐらいじゃなあ。

――馬木さんみたいに相撲が強い人は、部落でも有名だったんですか？

「もちろん有名よ。知れ渡たっちょる。」

9. さまざまな盆行事と武左衛門信仰

――盆踊りなんかも参加しました？

「もちろん。これもうちの上鍵山にあったけんなあ。いまは全部統一してしもうとるけんど。町に一箇所になったけんどなあ。上鍵山は昔から盆踊りの、いわゆる元祖やったんよ。それから今の日吉の中央へもっていったんよ。で、全体でやるようになったけどなあ。昔はこの地区だけで、うん、踊りよったなあ。」

――じゃあ、山口さんも積極的に盆踊りに参加した？

「うん、そう。うちの姉ちゃんもなあ。で、段々過疎になって日吉村へまかしたんよなあ。盆踊りの歌い手なんぞ全部、上鍵山の人でなあ。盆踊りのなかに「帰村」というのがあらいなあ。武左衛門の。」

――昔はやっていたんですか？

「そうそう。今もでもよるけどな。盆踊りの中にあるけどなあ。」

――じゃあ、やっぱり、武左衛門に対する信仰とか、尊敬の念とはがあったんですね？

「もちろん。やっぱ、武左衛門さんに追いつく偉人は、出とらん。この小さなとこで衆議院になあ、出たり、偉人はものすごくおるけど、やっぱり武左衛門は命を張っとるけんなあ。うん。みんな崇拝しとらいなあ。尊敬しちょらい。」

――あと、この地域は相撲を盆の季節に、夏の季節にやりますよねえ。他は秋祭りに盛んなところが多いのですが‥‥。

「ここは真夏にやるよなあ。秋祭りに相撲をやるのが普通よなあ。」

――特殊かなあ、とも思うんですが。この辺の秋祭りは？

「秋祭りと併用してやるとこもたくさんあらいなあ。それが普通よなあ。秋風が吹いて。」
――ここら辺の秋祭りは神輿ですか？　だんじりですか？
「昔は日吉神社の秋祭りは凄かってなあ。うちらの日吉神社は。練りよなあ。牛鬼。四つ太鼓。神輿。あらゆるものがこの部落にあってなあ。元祖やったけん。日吉村で一番ここが昔、栄えたとこらしいけんなあ。上から下のほうへ段々移りだした。いまは昔のような賑わいはない。形式的に車で運んどる。いまは人間がおらんけん。」

10. 武左衛門への追慕

――そうですか。しかし、武左衛門がそんなに尊敬されていたとは知りませんでした。
「うん。武左衛門さま、じゃけんなあ。神様のようにみんな慕っちょらいなあ。」
――そういう意味では、相撲でもって活気づけるというか、魂を呼び寄せて元気もらおうとか‥‥。
「そうそう。六地蔵の名前を捨てて、武左衛門になじみがあってなあ。みんな。」
――だけど、いまはまた、六地蔵に‥‥？
「2 つの呼び名があらいなあ。」
――じゃ、みんな武左衛門相撲ということで親しんでいたんだ。
「そうそう、そう。」
――じゃ、いまも、そういう意味では、武左衛門相撲というかたちで‥‥。
「うん、やっぱ魅力あるんぜ。」

――はい、わかりました。どうも有難うございました。非常に参考になりました。

―終―

V

峡谷に響く力士の息吹：人を育て、地域を拓く

――宮本幸孝氏に聴く――

愛媛県北宇和郡鬼北町日向谷在住
1932（昭和 7）年生まれ
インタビュー：2012 年 9 月 12 日、自宅

1. 四国大関・日の出山のこと

――この地方の相撲のことをお聞きしたいのですが。

「先祖伝来この地に住んでいるんで、聞いたことを若い者に伝えようとしますが、聞こうともせんし、話にならんですが。もともと、この地域は井谷家庄屋、それから御番所というて、この下に、伊予土佐の御番所が藩政時代からあったんです。うちは、宮本家は、それに付随したようなもんで、御番所で、五人頭というか、その一人として地域を治めよということで、ここに上がってきて数百年、ここで生きてきたんですよ。」

「そこで相撲のことについてですが、聞いたことがいろいろある。ここの宮本家の妻が政子というが、実家の吉川家に相撲に関しては日の出山という相撲取りがおりましてな。吉川清治。これが大変な力持ちで、伊達家のお抱えの相撲取りじゃった。この人を他所に出してはいけんというので、当時は大阪相撲というか、江戸相撲というか、そういう相撲界に、今みたいなプロにならん前に、この人は強いもんじゃけん、宇和島経由で相撲が来たときに、どうしてもこれを連れていんで横綱にしたいという声があってな。それから、地域の庄屋がなあ、これは吉田藩のお抱えの相撲で、井谷家が自慢にしておるものじゃか

ら、手放さなんだんよ。奥さんも他所に行っては困るといった。で、地方巡業をして廻りよった、その当時は今のような相撲取じゃなかったろうが、その人がスカウトしたらしい。それがうちの妻の血筋を引いた吉川家の日の出山。この下に、吉川というところがある。」

――一寸待ってください。日の出山というのは吉田藩のお抱えだったんですか？

「そう。」

2. 人を育て、村を支える力の源――地相撲

「それから、明治大正頃に‥‥。農山村というのは力でな、開拓をし、山村の仕事をするには、伐採した木を引っ張って運ぶには、力のある者、米一票担いでも、力のある人がエラかった。それで、相撲を取って。そういうことをしながら、地域で生きてきたんじゃ。で、相撲を取って、明治大正にかけて、この地域は奥組、特別に議事録もあるけれども、組で集まったら相撲を取って、蓄えながら、作業をしながら生きてきた。」

「ま、私が知った、日吉でのいいたいことは、やっぱり、それが欠けとった。私ども伝統を受け継いで、昭和の戦後にかけても武左衛門相撲があるし、他にも相撲大会があった。これに負けちゃいけんということで、私は青年団の分団長をやっていたのは、もう 4、50 年も前のことじゃが、その頃は、やっぱり日向谷（ひゅうがい）は負けたことがなかった。この部落でなあ。4 年、5 年。いつも優勝しよった。それは、相撲というものがなあ、農林業をやるうえで体力を作る、1 つの物を持ち上げて、競争に勝ちながら、地域の橋が壊れても、力のない奴があったら、それを助けて復旧のために力強く仕事した。これじゃったんじゃ。皆が支えて。で、六地蔵相撲とか、武左衛門相撲とかあるけど、この辺では応援をして、ワイワイワイワイ言うて、地域が生きてきたんじゃ。」

3. 二代目・日の出山こと井上清

「日吉の下鍵山地区から少し入って、百メートルか 2 百メートル離れたところに、日の出橋という橋が架かっている。日向谷から出た。昔から日吉村が、井谷先生が作られた地図には、日の出橋あったんよ。土をもって、木の上に土をもる土橋（どはし）がつけてあった。今、国道が抜けて、日の出橋というて残っている。この橋を日の出橋という理由は、日吉の吉川清治という、一番の相撲取り。この地域には四股名を譲るという言葉がある。強い人が出たら、その人に名前を譲る。で、井上清という人に四股名を譲って。ところが、次男坊だったもんで、兄さんに農山村の業務を譲って、八幡浜のほうに移転されて、海運業、運

送業をされた。これは力の強い人であって、米二表くらいは軽々と担ぐような人であった。それは日向谷の井上清。日の出山の二代目。日の出橋の向こうに生家があった。で、いま日向谷で残っとるのは、日の出橋。それが日の出山の話。それを知っているのは私くらい。」

4. 初代・日の出山の墓石

「日の出山は二代にわたって素晴らしい人であった。初代の日の出山は、高知県の梼原(ゆずはら)町の下西の川に墓がある。四国大関と書いてある。墓碑に。ここから県境を越えて 4 キロほど行ったとこに高知県梼原(ゆずはら)町下西の川というところがある。そこの上に日の出山のお墓がある。」

――なぜ梼原町に墓があるんですか？

「時代の変革によって、日向谷で旅館をやっていた。その当時、力があるんで、運送業。米や伊予土佐の物産を馬車に乗せて運びよったが、トンネルが抜けてからは自動車が走り出して、旅館もトンネルが抜けてから不振になって、移転されたんよ。土佐の人らは正直な人で、伊予の人のほうが利口なかったんよな。で、土地を買い、そこでまた一旗あげて。日出山には子どもがなくて、日吉村父野川の高木家から養子さんを迎えられた。それが吉川吉三郎(よしかわよしさぶろう)。この人が、日の出山の世話をして最後を見届けた。」

5. 山村の公共事業と相撲大会

――農山村での生き方と相撲にはどんな関係がありましたか？

「農山村で生きるには重労働をせんにゃいけん。力のある者がよかった。いろいろ家庭を支えながら、1 つの橋を架けて、あるいは石垣を積んでも、災害があっても、力のある人がえらかった。で、どんどんどんどんやってきて、地域が持ちこたえられてきたんじゃな。」

「で、私は相撲の話から入ったけど、その当時うちの親父は父野川から養子に来たんじゃが、大正時代になあ。ま、日の出山やあの吉川の養子などは、公共事業をやったあとは、あの頃、アンパンが大変な賞品じゃった。アンパンを賭けて、勝った者には。この奥組は公共事業やったら必ず相撲を取って力比べなどして、行きて来たもんだって。日向谷の奥組。いま 3、4 軒しか残っていない。うちを含めて。」

6. 六地蔵奉納相撲の思い出

――六地蔵相撲というのは、下鍵山以外にもありますか？

「それは、ないが、六地蔵相撲というのは葛本さんなどがやりよって、今年からたいした相撲は無くなった。うちの子どもが役場に行きよるが、これらが高校生を集めて、大相撲になって 5、6 年は続いたんです。野村高校の相撲部やいま東京相撲で相撲を取りよるような現役が日吉に来てやりよった。うちの息子が公民館主事のときに、土俵も本格的に築いて武左衛門広場でやっていた。それが今年、なくなったんよ。」

――土俵を作ったのはいつごろですか？

「6、7 年前じゃろ。7、8 年、10 年になるかなあ。それは本格的な、土嚢を入れてなあ。日吉村時代にやったんよ。で、鬼北町になってから、4、5 年は各部落対抗、それから六地蔵の商工会や下鍵山のやる相撲というのは伝統的なもの。ところが、古い人がいなくなったんよ。」

「なんでやり始めたかというと、下鍵山地区の大火、あるいは疫病を鎮めるために、六地蔵を祀りながら、あっこで相撲を取り始めた。そこでは日向谷出身の人も取っとるやろし。それでずうっと来た。」

「私らも青年団の分団長を 5，6 年やった頃は全勝優勝で、表彰状も日向谷の公民館に掲げてある。私らの時代は絶対負けなんだ。それで、いま、葛本先生という人がいきさつを知っていて、最初は普通の相撲から始まって、「小々五人」、「中五人」、「大五人」とやって、最後に地域の繁栄を祝って、手を叩いてなあ、「また、来年の今日今夜、取り結びましょう」いうて、ショションのショイいうて、分かれて、力士がな。今まで、それが続いて来たんよ。今年は何したか、私も行かなんだ。」

7. もう 1 つの呼称――武左衛門奉納相撲

――武左衛門相撲という言い方もしますよね？

「あれはなあ、武左衛門祭りを兼ねて、広場が出来てからだと私は思う。あっこ、明星が丘という名前をつけておりましょう。それから日吉神社があり。この神社は日吉の総体的な神社としてはまだ若いんよ。下鍵山地区が繁栄すると同時に、あっこが日吉神社となり、そこのふもとに英霊の碑を建てたり、武左衛門の碑を井谷家の二代目正吉さんがあっこに建てたわけよ。それで、あっこで相撲を取るもんじゃけん、六地蔵相撲から代わったのが武左衛門相撲。武左衛門のそこの碑の前で取るけん武左衛門相撲。武左衛門のために相撲を取ったわけじゃないが、象徴したのが、そういう大業を成し遂げた、良いか悪いか、いわゆる暴動、政治的に成功した

のが武左衛門一揆じゃけんど。それで、あっこうを明星が丘として、あっこへ祀って、それから、六地蔵相撲とは言わんようになったんよ。武左衛門相撲として日吉村一帯、それから近所へと名が知れてきたんよなあ。自然に。」

――じゃあ、日吉村時代に武左衛門相撲はあったんですね？

「日吉村時代に武左衛門相撲になったんよなあ。あっこに井谷先生らの武左衛門に対する記念碑が建った。その頃から武左衛門相撲になった。それまでは六地蔵相撲。あっこに始まったのは、火事あるいは疫病があって、治めるために六地蔵を祀ったりしてなあ。そしてやってきたものを受け継いだのが商工会であり、下鍵山じゃったんよなあ。もともとは。下鍵山の商工会と有志が、受け継いでやりよった。それから、日吉村がそれを引き継いで、武左衛門相撲の顕彰碑の前で取る。今でも下鍵山は念仏唱えて六地蔵の祭りをし、部落の一部分の人がお祭りをしてなあ。そのあとに相撲を取らんとすまんという。そのあと公民館事業として細々とやってきた。」

8. 日向谷・愛宕さんの相撲大会

「日向谷の愛宕さんもそうなんよ。愛宕さまという、私たちが若い頃から先祖伝来、ここでは 40 数番の取り組みをして終わる。相撲をとらんかたったら腕相撲。そして部落の人らが、まだ続けている。日向谷の場合は、火災がこの地域で起きて、祈願を込めてそれを始めた。愛宕さまは火の神様であるから、それを鎮めるためには三十三結びの相撲を取って火災がないように部落民こぞって祈願をして来たことがまだ続いている。」

「私らが役員時代は、人がおらんので腕相撲をした。20 年くらい前、30 歳くらいの頃。その頃は相撲取りが来んもんじゃから、幼稚園やら保育園やら小学生を日向谷部落がやとってやったことある。最近は子どもが怪我したらいけんけん保険金をかけて 2、3 年前までやった。今年は秋に相撲があるんですよ。9 月 24 日。これは地域の人が三十三番するわけよ。形だけでもでせにゃいけん。」

9. 神社合祀と地相撲の衰退――高研神社の奉納相撲と日向谷の土俵場

――伊予と土佐の県堺でやっていた地蔵山の相撲については？

「父野川系統だから、私は存じ上げない。ところが、「高研さん」にそれがあったんよ。高研さま。神社統合で三つ神社があったのを上から統合させられた。高研神社、長野神社、河内神社。それを海神（わたつみ）神社に合祀した。高研神社は伊予・土佐が集まって祀りよった。祭りのときは宮本、梅本、金山の三家が祀る。これが土地をもっておって、神社を祀ることは部落の人がすべてかかわっていた。それで、高研神社は相撲を取りよった。あっこの土俵で相撲を取って伊予・土佐の者が、この界隈の人が来て。で、酒と何かを持ち上がってなあ。それを楽しみにお祭りをしよった。それが大正時代に政令で多くの地域が祀りよったが、国がいけんと。統合を命令されてなあ。で海神神社へ合社した。それで高研神社の相撲もなくなった。ほやから上の神社も下に降りたわけよ。で、降りて三社大権現って祀っておったけど、今、高知県へ祀っておる。盗まれた。石碑を勝手に持って行った。三社大権現という。淀を越したところを 2 キロくらい行ったところに取って行って祀っちょる。」

「日向谷には土俵場（どひょうば）ちゅう、地名があるんぜ。そこに若い人らが集まって、教育した。日の出山がおったころ、地域の若い衆を育ててなあ。山の地名が土俵場ちゅう。吉川家の所有しとる山じゃけどなあ。」

「ということで、相撲いうものは、相撲を取りながら農山村の事業、労働に対して、人が一家を支える力だったんじゃな。そして集落も神社を中心にしながら藩政時代からずっとやってきとるわけよ。相撲ちゅうのは地域の人間の生きていく力じゃったんよなあ。相撲をよう取らんようでは地域で生きて行けん。あいつに投げられたから投げたろうか、とか、ああ、こりゃやらないけん、とか、生きていく根源は男の力じゃった。闘志力じゃった。それがあって地域が栄えてきた。地域にはたくさん相撲大会があった。あっちこっちに宮相撲があったんよ。そこへ若い衆を連れて行って、先輩が連れて行って、お祝いして、一杯の飲まして、ああ頑張れよと。それでやってきたわけよ。」

「で、あのなあ。戦後、梅本さんちゅうのが、養子に来られてなあ。非常に力が強かった。私らは高ノ子のお寺とか、武左衛門とかで五人抜きとか七人抜きとかに出られてなあ。素晴らしい力士で、楽しくてなあ。昭和 23 年ごろから、30 年、40 年までなあ相撲をとって。」

10. 叔父・白王山のこと

――農山村は力が大事で、それが地域を支える、ということですが、だからもっと働け、というふうには言われなかったんですか？

「言われてたよ。それがなあ、私の親父の兄貴というものは、相撲取りで優れてたんよ。父野川で頑張りよったが。強かったもんじゃけん。それで親父が相撲を取ってボデンは取るは、えらいもんじゃ、長男があがいなことするもんじゃけん、親父ちゅうのはここに養

子に来たんじゃけどな。働き一本の真面目じゃったんよ。で、四股名はなあ、うちの親父の兄貴は白王山(しらおうざん)いう。」

「白王山という淵があるんよ。父野川の野のやになあ。で、白王山というて、おだてられて相撲取って、武左衛門のほうや、ここら辺では力持ちやけん、おだてられてなあ。それから、土方をしたり、腕づくのことで 50 貫百貫を持ち上げるもんじゃけん、土木に身を替えたんよ。で、梼原のダムのあるところの仕事や、あっちこっちやってなあ。もう、女性にもモテて、いきよったが、結局は親父の兄貴というものは、熊谷組、大手の建設会社に入って、神戸の上水道をなあ、戦争中、請け負うてやるようになったんや。大戦争の真っ最中に、朝鮮人や地域の人を何十人か雇うて、神戸の上水道を請け負うてなあ。熊谷組の下請けで、現場の責任者としてやってきたんよ。それが宮本家の相撲に関係することや。相撲取りより強かった。」

「で、もう 1 つ言いたいことはな、栗野守三郎いうんやけど、動力が関係ないときに、葺の川いうて、父野川の奥に寒山があってな、これを死なすいうことは、製品にして出すいうことで、大きな水車の力で製材をしよったんと。ところが水車の心棒が 120 貫ぐらいあったんと。それを兵隊検査にいって戻りがけに、12 人ほどが父野川の奥へ荷造りして、ヤッサ、モンサと揚げとったんやそうな。ところが守叔父が兵隊検査から戻りしな、ハンカチを肩に当ててなあ、逆に下に向けて 200 メーターほど荷造りしたものを担ぎ上げていったんと。ほたら、これは誰がしたんや言うことになって、調べたら守三郎より力のある者はここにはおるまい、ちゅうことになって。そがいなことにおだてられて、栗野守三郎は相撲も強いし、まあ、上手じゃなかったいうてうちの親父は言いよった。あれが相撲上手だったら大変なことじゃった言うて。」

「で、熊谷組の下請けをしながら、戦争中は、頭あまりよくなかったんじゃ思うが、現場責任者で、淀川から水を引いてなあ、神戸浄水場へ引いたのは、守三郎の仕事やったということなんよ。それが戦争中。で、私の姉らはそこへ皿洗いやら、地域の人の出稼ぎを何十人も雇うていって、仕事したんよ。」

――栗野守三郎というのが、白王山(しらおうやま)？

「そう、白王山(しらおうさん)。で、相撲をとった者が認められる時代は、とにかくその頃は、仲士とかなあ、港湾の水揚げする力のある者らがなあ、荷揚げをしたりやなあ、土木に出たりやなあ、それが頭があったら頂点にある時代になったんよ。で、うちの親父が体が弱いけん、ここに養子に来た。で、うちの親父が言うのには、兄貴が出たもんやけん、地域を守らにゃいけんけん、養子にきたんやと。親父は北九州から、大牟田のほうからなあ、行っとっちゃらしいが。今やったら社長になっとるぞよ、言よった。」

11. 腕で来い、仕事で来い―― 裸一貫、誠実に生きる

「そして、戦前、戦後はなあ、ずうっと時代が緊迫して、支那事変が始まって、日本が大変な戦争を起こし、派遣した支那大陸の人らがなあ、大陸で事件を起こし、そこから召

集が始まった。それから今日に至ったんじゃ。」

「日向谷で代議士が、参議院が一人と衆議院が、井谷が出とるんで。戦後。日向谷でなぜそんな人が出たか。苦しい、貧しい、努力をして考えた者が、こういう人が出たんよ。他ではないんだよ。」

「そして、欲望をもって出たわけじゃないのよ。人の道とはどうか、人道とは何や。これで、地域の人間が出たんであって、大きな儲けをしょうじゃろな、いい生活を人よりしようてな者は、私の日向谷では出てないんじゃ。だから、腕ずくで、体で、それから地域の人になあ、決して儲けとも言わんが、人らしく生きていくような人間をなあ、相撲とか、なんとかなあ。」

「日の出山の時代は、立派な字を書いとるが、地域が治まっちょったんよ。腕で来い、仕事で来い、人に迷惑かけんように立派に皆が頑張ってきたんや。これが言いたかったんや。」

――そうか、武左衛門相撲も、そういう背景があったのか？

「明星が丘に土俵があって、やることはなあ、土俵があってとうとう武左衛門に代わった。うちも相撲一家ぜ。うちの親父の兄貴ってのは非常に強かった。俺が日向谷の青年団の分団長のころは表彰状 5 回。負けなんだ。」

――そうか、名前は武左衛門相撲でも、六地蔵相撲でも‥‥。

「あそこに皆が集まって、他所の部落からも来て。それが地域を支え、農村を支えてきたんで。誰に負けてもいけん、他所から来た奴に負けてはいけん。これがあったん。吉田藩ころから、お抱え相撲の吉川清二を出せ、日の出山を出せといっても、絶対に他所に出さなんだ。プロに行く言うても。あのころ。吉田藩も、井谷の庄屋も絶対に出さなんだんぜ。それが歴史。お母さんが、母ちゃんが出さなんだいう話もあるしなあ。それが地域の、農山村を腕ずくで管理してなあ、生きてきた証しなんよ。」

――よく分かりました。今日はお忙しいところ、どうも有難うございました。

―終―

VI

義民伝承と民俗行事：六地蔵奉納武左衛門相撲のこと

――大森時政氏に聴く――

愛媛県北宇和鬼北町下鍵山在住
1941（昭和 16）年生れ
インタビュー：2011 年 8 月 22 日、旅館・梅の屋

1. 六地蔵相撲と武左衛門相撲

――日吉で盂蘭盆に行なわれる同じ相撲行事のことを、武左衛門奉納相撲とか、六地蔵奉納相撲と言いますが、両者はどのような関係にあるんですか？

「夢産地（特産物販売センター、道の駅）のところに六地蔵さまを祀っていたんです。江戸時代の話しになるんですがね。で、今から 180 年ほど前、明暦期に疫病が発生しまして、当時の人たちが六地蔵さまの前で三十三結びの相撲を奉納して疫病を退治しようということから始まったらしい。ですから、最初は六地蔵の奉納相撲ということで、そこで取っていた。」

「それから今度、武左衛門一揆が関連してくるんです。井谷正命（いたにまさみち）という方がおられて、最初に日吉村を開かれた方なんですが、明治時代から大正、昭和 9 年くらいまでの方なんですが、この方が武左衛門一揆というのを発掘して、研究もされておられて、武左衛門さまを顕彰するために、1 つは武左衛門広場が作られ、そこへ土俵を作られて、そこへ六地蔵さまを移されて、そこで奉納相撲を始めたんです。ですから、武左衛門広場で相撲をやるもんですから、通称武左衛門相撲と言うことになっておるわけですが、実際は六地蔵の

奉納相撲なんです。ですから、地域の人らは武左衛門、武左衛門相撲と言いますが、六地蔵奉納相撲ということで、ずっとやっておられますね。今も。」

2. 武左衛門広場の開設と武左衛門相撲

――じゃあ、武左衛門広場ができてからは、通常、武左衛門相撲と言うようになった？

「そうです。その当時、あまり娯楽は無かったから、この地域の人たちは相撲というのがものすごい楽しみだった。ですから村内でも地域にそれぞれ相撲取りがいて、それぞれ四股名もつけておられた。そういう人たちが、日吉だけではなくて、城川（しろかわ）とか梼原（ゆずはら）とか、野村など、あちこちに相撲取りと言われる人がいて、地域／＼に相撲大会があって、相撲取りがそこへ全部集まって、相撲を取って楽しんでいた。あらゆる所へ行って相撲を取っていた。そのときに、日吉で、この地域でやる相撲は、武左衛門広場の名前をとって武左衛門相撲大会、通称武左衛門相撲と言っていた。」

――この近くというと、城川、梼原、野村ですか？

「ええ。神社奉納の相撲大会でした。それは賑わいましたね。昭和 10 年からですね、武左衛門広場で相撲を始めたのは。」

3. 下鍵山の大火（昭和 10 年）と六地蔵・地蔵堂の移転

――旧日吉村誌では大正 10 年となっていますが‥‥。

「武左衛門の碑を建てた時ではないでしょうか。新版の村誌では昭和 10 年ですね。大正 10 年に現在の武左衛門広場に移されたと書いてありますが、武左衛門広場は大正 10 年に出来たんでしょうかね。」

――大正 6 年に部落の氏神である大山神社を現在の土地に移して、翌 7 年に日吉神社と改称した、とあります。地蔵堂をそこに移築したのが昭和 10 年となっています。

「昭和 10 年が本当だろうと思います。というのは、昭和 10 年 6 月 27 日に下鍵山で大火事があったんです。この部落の半分が焼けた。で、六地蔵さまというのは、町中の焼けたところにあったんです。焼けたあとに武左衛門広場に移転したと思いますので、武左衛門広場で相撲を取るようになるのは、昭和 10 年で間違いないと思います。村誌では 7 月 24 日に、火災のあとに移築したとなっています。」

4. 下鍵山部落と六地蔵相撲

――もともとは、現在の夢産地のところにあったんですね？

「一番の最初は、そう。それから途中で、現在の国道の 4 つ角、交差点の少し向こうの橋の袂の所に移されていた。そこも火災にあったんだと思います。」

――というと、昭和 10 年説が正しいということになりますね。

「ええ。」

――だとすれば、武左衛門相撲という名称が登場するのもこの頃、ということになる。

「昭和 10 年以降でしょうね。」

――最近では、相撲大会の名称は、武左衛門奉納相撲ではなく、六地蔵奉納相撲になっていますね？

「はい。ですから、もともと六地蔵の奉納相撲だったのです。ずうっと六地蔵相撲で、通称は武左衛門相撲だったわけですから。下鍵山部落がすべて運営してきておったわけですから、下鍵山部落はずっと六地蔵奉納相撲ということで、毎年 8 月 24 日に、旧暦の 7 月 24 日にやっておったということです。ただ、通称、みんなが武左衛門相撲と言うので、この呼び名が通っていたのだと思います。最近のビラでは、「六地蔵奉納武左衛門相撲大会」となっていますね。」

5. 武左衛門相撲と義民伝承

――武左衛門相撲と義民伝承とのつながりについては、昭和 10 年以降ということになりますか？

「相撲とのかかわりは、そうですね。昭和 10 年以降ということになりますね。」

――それ以前には武左衛門の法要などとのかかわりは、一切なかった？

「武左衛門の法要は、一部伝承も入っているが、1795 年（寛政 5）に武左衛門さまが処刑をされ、ひそかに念仏供養をやっていたようですね。で、それを発掘され、世に紹介されたのが井谷正命先生なんですが、それが発掘されてから、とくに下鍵山部落で毎年 8 月 13 日に施食会（せじきえ）といって、金と太鼓を叩いて、お坊さんにお経をあげてもらって、先祖の慰霊をするという行事をずうっとやってきました。」

――それも井谷正命が一揆を発掘して以降のことですか？

「下鍵山で始めたのは、そうじゃないかと思います。明治の終わりごろから。上大野（かみおおの）部落というのが高知との県境にありますが、ここは武左衛門さまが住んでいたところで、そこでは処刑されたときから密かにやっていたようですね。で、吉田藩の役人が来て、それは罷りならぬということで､墓など全部取り壊して川に投げ捨てたという伝承もあります。その当時から、そして現在も、上大野部落では施食会をやっている。」

――じゃあ、下鍵山で正式にやりはじめたのは、井谷正命が武左衛門一揆を発掘して以

降のことということになりますね。

「正確には地元の人に聞いていないのですが、たぶん、そうだろうと私は思います。ですから、正命先生のところに武左衛門の位牌もちゃんとあって、いつも 8 月 13 日には正命先生のところから、先生の位牌と武左衛門の位牌の両方を斎場に持って行き、和尚さんに拝んでもらい、鉦太鼓で念仏をやります。ただ、武左衛門さまについては平成 8 年だったか、奉賛会が出来て、それを引き継いでいます。下鍵山部落も一緒に供養をしております。」

6. 民俗信仰と義民伝承――六地蔵相撲と武左衛門相撲

――では、そういう流れと六地蔵相撲を組織する主体というか、主催する人たちとは直接は関係ない？

「直接は関係ないですね。六地蔵の場合は 8 月 24 日に、これも施食会をやりますからね。念仏で法要をして、そのあと相撲大会があるということです。」

――なるほど。武左衛門の法要は 8 月 13 日と言われましたね。それと直接は結びついてない？

「そうですね。ただ、広場が武左衛門広場だったから、武左衛門相撲大会になったんだと思いますよ。」

――ということは、開催する広場の名称が決定的だった。

「ええ。」

――では、武左衛門相撲とか六地蔵相撲の主催者は、とくに武左衛門の追悼とか供養ということを意識したわけではない？

「相撲大会ということでは、ないと思いますね。部落の人が意識したのは、六地蔵さまだと思います。」

――ということは、奉賛会などのほうが、それを意図的に組み込んでいった？

「そういうことです。」

――相撲をやっていた人とか、組織する人が取り立てて武左衛門のことをどうこうしようとして、名称を使ったわけではない？

「ではないですね。ですから、正式に宣伝ビラに「六地蔵奉納武左衛門相撲大会」と書くようになったのは、昭和 64、65 年からですよ。それまでも武左衛門相撲大会とは言っていたんですよ。昭和 10 年に六地蔵さまが広場に持っていかれてからあとは、たぶん、そういうふうに言われてきたんじゃないですかね。私が子どもの時分も、武左衛門相撲、武左衛門相撲と言っていましたから。昭和 30 年くらいですからね。」

――ああ、そうですか。じゃあ、義民伝承と地相撲が結びついたのは、広場に六地蔵が移された昭和 10 年以降ということに。で、土俵が広場に出来て決定的になる。

「そういうことだと思います。」

7. 起源は厄払い

――地蔵と相撲の関係は日吉の昔話にも語られていますが‥‥。厄病とか、厄払いということで。

「それは間違いないようですね。」

―― 一揆に対する追悼というような意味は込められてなかった？

「と、思いますね。ですから、六地蔵さまを移されてから、何年間かは知らないが、相撲大会をやめたらしいですね。その祭りを。地蔵さまを移しただけで。それで大火事が起きたという。それからまた、移されて、三十三結びの相撲大会が始まった、というような話をチラッと聞いた覚えがありますねえ。」

――今の夢産地の所から地蔵を移して、相撲をしなかったら、そのときに大火事があった、と。

「それは、私の単なる聞き違いかもしれませんが。」

――武左衛門広場の上に日吉神社がありますが、これと相撲の関係はありますか？

「ないですね。相撲は、六地蔵さまに付いて回ったということだと思いますね。」

――ですから、ここでは盆とかの供養と関係しているんでしょうか？

「旧暦の 24 日というのは、盂蘭盆になるんですね。ですから仏教のほうの関係ですね。15 日の盆に対する盂蘭盆です。」

8. 武左衛門奉賛会の設立と活動

――わかりました。やはり武左衛門の顕彰運動がなかったら、武左衛門相撲という呼称もありえなかった、ということのようですね。

「昭和 3 年には近辺の農民の協力を得ながら、大島から宇和島経由で武左衛門碑を作る大きな石を運んで来るんですよ。大きな犠牲を出しながら。一揆の道を辿って、沿線の住民が無報酬で協力した。それくらい沿線の人たちも武左衛門に対する想いがあったんでしょうね。」

――地下に隠されていた信仰が井谷親子の力で‥‥。

「呼び覚まされたということでしょうね。ですから、奉賛会が武左衛門堂を昭和 60 年代に建てたんですよ。位牌を井谷先生の所で預かって貰ってたんですが、それは気の毒だということでお堂を建てて位牌を安置しようじゃないか、という話があって、建てたんですがね、その時も沿線の人たちから寄付をしていただきました。2 千万ほど寄付を集めて。」

――平成 8 年頃の奉賛会も武左衛門信

仰復活の大きな力になりました？

「うん。武左衛門さんをもっと世に出そう、ということだったんですね。奉賛会が結成されたのは。宇和島に八幡河原というのがあるんですが、宇和島藩内に。そこに百姓一揆9千600人が集まった。この河原から逆に歩いて帰ろうじゃないか、ということで、一揆の姿をして蓆旗立てて歩いて日吉まで帰ったことありますね。平成になってからですね、それは。」

――奉賛会ができるのに何か背景はありました？

「日吉村の活性化をしないといけないということで、プロジェクトチームができて、下鍵山は明星ヶ丘を中心にして武左衛門さんで活性化を図ろうじゃないか、ということで、顕彰会が結成された。第2回全国義民サミットをやったこともある。いまも全国で続いています。」

9. 井谷親子と武左衛門・百姓一揆への共感

――武左衛門の顕彰ということでは、初代村長をやった井谷正命が決定的に重要ですね。

「そうですね。日吉村の母と言われ、父と言われる方ですから。明治23年の町村制が施行されて、そのとき5部落が合併して日吉村が出来た。父野川村、上大野村、日向谷村、下鍵山村、上鍵山村。そのときの初代村長が井谷正命先生。庄屋だった。先見の妙があった方なんですね。まず道路を開設しないといけないということで宇和島から日吉をへて須崎まで、現在の197号の道路ですが、そのもとになる道路を作られた。自分の土地や田んぼを全て提供して、私財を投げ打って道路を作り、町を作られた。文芸、たとえば漢文などにも秀でておられたし、これからの日吉は農業や林業を盛んにしないといけない、人を育てなければならないということで、自らも先生になり、若者を集めて井谷実業学校も作られた。昭和の30年代、40年代くらいまでは、井谷先生に教わった人たち、優秀な人たちが日吉におられて村を守ってきたといわれている。だから、日吉のもとを作られたのが正命先生なんです。多くの人がそう思っておられます。」

――井谷正命は、なぜ一揆とかに興味をもったんですか？

「社会主義者で農地解放をやられた息子さんの井谷正吉（いたにまさきち）という方が、戦後、昭和30年頃まで社会党で衆議院に出られましたが、この方が村長を退いて隠居していた正命先生に一冊の本を見せられて、それが武左衛門一揆のことを書いた『庫外禁止録』という本だったんです。吉田藩の役人・鈴木作之進が一揆の顛末を記録したものなんです。それを自分で写されて、本にして世に紹介された。武左衛門一揆のことを研究なさったんです。それからですね。武左衛門一揆が大きく取りあげられて来たのは。」

「ただ、それまでも、吉田藩の戸数が9千6百戸くらいあったらしいですが、それぞれに地域の人たちが、一揆で農民を救ってくれたということで、武左衛門さま、武左衛門さまと言って崇めていたらしいですね。それぞれの地域、地域で。」

――だけど、それを高く評価して世に出したというのが、また凄いですね。共鳴するこ

とがあったんですかねえ。農民魂というか。

「うん。井谷先生自身が自分の私財を投げ打って地域の開発を先導された。先生が作られた「我こそは貧しくなるも吾が郷の栄え行くこそ楽しかりける」という短歌にもありますが、いわゆる自分の故郷というものをいかに栄えさすかということに心血を注がれた。結局、それが奉仕の精神なんですよね。地域に奉仕するという。それと地域を救うために命を捨てて一揆を起こした武左衛門に共鳴するものがあったんでしょうね。」

――百姓一揆に共感するのは「庫外禁止録」がきっかけですね。

「武左衛門一揆の伝承は、それまでもあったので、もともと共感されていたのではないかと思います。」

――それにしても、百姓一揆に共鳴するというのは、当時としては凄いことですね。

「いまでも、百姓一揆を起こしたといえば、反逆児というように考える人もいますから。むしろ、その当時としては隠しておくのが普通であったと思いますね。そのようななかでも、その精神というのを村づくりに生かそうという考え方が井谷正命先生にはあったんじゃないでしょうか。身を捨てででも地域を救うという考え方が。」

10. 政友会系の父と社会主義者の息子

――とくに当時の為政者とか支配者に対して批判的であったというわけではない？

「必ずしもそうではないと思います。純粋に、村づくりや地域づくりの背景には、そういう精神が大事なんだということだったと思います。むしろ、政治的には保守的な、政友会だったですね。息子の井谷正吉は逆に社会主義者だったんです。」

――井谷正吉のほうは、なぜ社会主義のほうへ行ったんですか？

「『井谷正吉伝“風雪の碑　明星ヶ丘”』によれば、幼少のころから優しく正義感の強い少年であった正吉先生は、地主の家に育つ中で、社会の不平等や不条理を見聞し、実体験するうちに、無意識ながら社会主義に通ずる考えが育まれていたと思われます。それが、大正 8 年から大正 11 年の三重県七保村の時代に、当時の村長大瀬東作氏の庇護のもとに社会主義を研究し、運動家との交流を深めて、社会主義活動を展開するようになったのではと思われます。地主制度に反発をもっておられた。それから社会主義のほうへ向かっていったのではないか、と。この人は社会主義者の堺利彦や賀川豊彦、安部磯雄、革新的知識人の与謝野鉄幹や晶子などと親交があった。この人たちと明星ヶ丘、我らの村、というのを作られたんですよ。武左衛門広場の近く。四国で初めてメーデーが開かれたのも明星

ヶ丘。大正 11 年で、正吉先生の提唱によるものです。その記念碑もありますよ。」

――井谷正吉も村の指導者になっていくわけですか？

「そうです。農地解放後は、南予一帯を選挙区にして、選挙運動に行くとお百姓さんたちが手を合わせて拝まれたそうです。そのかわり地主クラスからは反発もあったでしょうが。全国の農地改革の先導者ですから。」

――じゃあ、この地域も農地改革は徹底してやられました？

「そうですね。」

――井谷正吉の社会主義的な考えに対して地域の人たちの反発はなかったんですか？

「まったくなかったですね。井谷先生がご存命中は社会党支持者のほうが多かったですね。日吉は。井谷先生は親しまれていた。ただ、村の昭和 30 年からあとの村の発展については、愛媛県自体は自民党だったから、冷遇されたのではないでしょうか。県庁に行っても。しかし、村民は決して井谷先生をどうこう言うことはまったくなかったですね。社会主義者でありながら、温厚な方でしたね。人間がなにか丸っこい方だったと思います。」

「若い頃は三重県海部郡七宝村の農事技術員として勤務して、農業補習学校の教師になり、村長大瀬東作の薫陶を受け、政治運動や青年教育を行ったそうです。男女平等を唱えて青年団を作ったとか、土民協会を組織して農村問題の研究を行うとか。3 年間そこにいて、大正 11 年に日吉村に帰られ、この年の 5 月、四国初のメーデーを明星ヶ丘で行うわけです。」

11. 村びとの相撲への関心

――だけど、そういう流れと相撲とは直接結びついてはないですね？

「ないですね。」

――むしろ村の習俗として、ずっと伝えられていた。しかし、そういう先覚者の親子がいたということと、それをベースにして、のちに町おこし、地域おこしのなかに相撲を取り入れよとする動きが出現し、現在のこの地域の奉納相撲をめぐる状況が生み出されたわけですね。

「ええ。ですから、町の教育委員会も文化を生かした地域づくりに取り組んでいます。」

――村政や村の指導者が意図的に相撲をバックアップしたわけではない？

「ないですねえ。」

――むしろ、相撲好きの人たちが集まって、集団的に取り組んだ。もちろん、そのベースには先祖供養とか、村の活性化の願いがあるにしても。

「やはり地域の人ですね。地区の人たちが主になってやっていた。」

――それでも村の人たちは、昭和 10 年以降は武左衛門相撲、武左衛門相撲と云って親しむようになった。

「親しんどったんですね。娯楽がないですからね。こういう地域ですから。ですから、それが一番の楽しみだったんですよ。当時は。」

――大森さんが小学校に通うのは、戦後になってからですね？

「そうです。三六三四制が発足した昭和 23 年が小学校 1 年です。」

――大森さん自身、相撲について、どんな思い出がありますか？

「相撲とらされましたもんね。子どもでも、いろんな大会があって。私らの年代ぐらいまでじゃないでしょうか。本当に相撲に親しんで取ったのは。でも今は、当時相撲を取っていた人がみんな年寄りになって、後継者がないわけですよ。地域の人らが 24 日だけ出てきて相撲を取って、三十三結びをやっとるわけですでれども。三十三結びを奉納しますから、何とか助けてくださいという祈願をする。」

――あと何か、相撲について印象に残っていることはありますか？

「夏から秋にかけて、神社のお祭りがあるでしょう。この辺はだいたい、秋祭りのほうが盛んなんですよ。日吉の相撲は夏ですが、秋祭りの頃は各地で盛んにやっていたんじゃないですか。日吉の力士もほうぼう出かけて行って。現在はほとんどないですね。その名残が野村の乙亥相撲ですね。乙亥相撲くらい有名だったんですよ、日吉の武左衛門相撲は。だから当時の東富士であるとか、朝汐であるとか、前田山であるとか、そういった関取も来られたんですよ。うちは旅館ですけど、うちなんかにも泊まったらしい。学校のグラウンドでやりましたね。昭和 30 年前後だったと思います。巡業だったですかね。」

12. 村びとの武左衛門への想い

――そうですか。やっぱり、武左衛門の顕彰運動なくして武左衛門相撲はなかったということですね。大森さんは子ども時代から武左衛門のことを知ってました？ 一揆を起こしたこととか？ 子ども時代にも武左衛門というのは尊敬される人物でした？

「そうでしょうねえ。うん、ほとんどの子が知っていたと思いますねえ。」

――では、きっと戦前もそうなのでしょうねえ？

「そうだったと思います。」

――凄い人物だと思われていたわけですね？

「ええ。小学校の教科書に武左衛門のことが載っているんです。人権教育の関係で。今、小学校で武左衛門太鼓をやってますが、これらも最初に武左衛門一揆の顛末について子どもたちが話しをして、それから武左衛門太鼓叩くんです。8 月 14 日に「武左衛門ふるさとまつり」があるんですが、そのときは、まず太鼓を叩きますね。小学校の子どもたちが。」

――この点は、明治 17 年に起こった秩父事件、埼玉の秩父の農民運動とは決定的に違いますね。ここは政府から「暴徒」という烙印を押されて決定的に弾圧された。洗脳教育が展開され、決起した農民やその家族は周囲からも敬遠された。顕彰運動が起こるのは1970 年代になってからです。それと比べると日吉村の武左衛門一揆の場合は大きく違う。

「そうですね。全国サミットをやったとき、福岡や新潟の新発田で顕彰運動をされている方が来られた。そのときに、日吉が行政をあげてやったことに驚いていた。羨ましいといって。福岡や新潟の新発田では、いわゆる反逆者扱いをされて、公然と活動ができないと言っておられた。」

「人権問題とかかわって、東の佐倉宗吾と西の武左衛門というように教科書なんかには書かれていましたが、それぐらい武左衛門というのは全国的に有名らしいですよ。」

――とくに、勝利した一揆というのがね。

「百姓たちが要求したのが 11 ヶ条だったんですよ。年貢安くせよとか、紙の専売を止めよとか。一揆のあとの裁定は 20 数ヶ条に及ぶんです。それだけ成功した全国的にも珍しい一揆らしいですね。」

――戦後は戦後で、農地改革の先進地で、社会党の地盤でもあった。

「そうですね。昭和 34、5 年でしたか、県知事選で自民党の白石という人が立つんですが、それまでは知事選でも県議選でも日吉村は革新のほうが強かった。逆転したのは白石さんという方が出られたときだった。そのときに逆転するんです。」

――それでも武左衛門の農民魂を脈々と受け継いでいる。私財を投げ打って日吉村の土台を築いた井谷正命と、四国で最初のメーデーを開催し、社会党の代議士として活躍した井谷正吉。この親子の影響によるのでしょうか。日吉には狭い意味での保革の枠組みを超えた、革新の伝統が息吹いているのですね。民俗的行事と義民伝承が「六地蔵奉納武左衛門相撲」という形をとって結びついた背景には、そのような革新の息吹が存在していたことが分かりました。今日はほんとうに長い間、ありがとうございました。

―終―

資料 1. 旧日吉村の民話（相撲のはなし）

＜奉納相撲＞

今から焼く百八十年ほど前に下鍵山に今でいうならば、赤痢とかチフス・コレラなどの大変悪い伝染病が流行したのだそうです。

このころは、今と比べて医学が発達していなかったそうで、これを防ぐことができず、人々は迷信的になんとかこれを防ごうとして、もう神に祈るしかないと思い、鐘や太鼓を叩いて念仏を唱えたり、お供物をして神様に伝染病がなくなるようにお祈りをして、これから毎年是が非でも人々を集めて、三十三結びの相撲を奉納することを約束したのだそうです。（日吉村教育委員会編『日吉の民話集』2004 年、46 頁）

＜人造渕の話＞

ある夜、富母里の「人造」という人が夜つりに行ったそうです。すると、川の中からカッパが出てきて、人造さんに「相撲をとらないか」といいました。

人造さんは、村でも一番といわれたくらいに相撲の強い人です。（中略）カッパと人造さんは相撲を始めました。カッパも強いし、人造さんも強い。なかなか勝負はつきませんでした。でも結局人造さんが勝ちました。

カッパは「この事は、誰にも言わないでくれ」というので、人造さんは「言わない」と約束したそうです。（中略）数日後、人造さんはカッパとの約束をやぶり、とうとうみんなに言いふらしました。（中略）そして、人造さんがいつものように川へ魚釣りに行ったとき、人造さんは渕へひきこまれて沈んだそうです。それからは、その渕を人造渕、と呼ぶようになったそうです。（同上、29-30 頁）

＜伊予地蔵・土佐地蔵＞

それはのお「さがの山」にあった話なんじゃが、（中略）木出しちゅうても昔のことじゃけん「せきだし」(川をせき止め材木を流しながら搬出する方法)いうちの、（中略）木をがいに集めち上の「せき」で止め、また下の「せき」を作りよったがと。そうしたらどういうはずみじゃったろうか、上の「せき」がはずれちしもうちのう。たまるかい、下で「せき」を作っちょった五十人ほどの人が「あつ」という間に流されてしもうた。

それで、誰もそこへよう寄りつかんかったがと。そこでのお、その人らが死んなはった、三月二十四日を祭り日として、地蔵さんを祭ったわけじゃそうな。その地蔵には、伊予地蔵と土佐地蔵があっちのお、毎年その日には、伊予と土佐から登っちきち、多いときには三百人もおっちのお、山頂の広場はぎちづめじゃったがと、酒や菓子を売る店まで出ちの、今は止んじょるが昔はそこじのお、相撲取っちのお、なんでも伊予で名取りの相撲取りも来ち、いりこぶりでやったもんじゃと。酒が出るけん、けんかもよう起こっち「けんか地蔵」ちゅう名で呼ばれる事もあったんじゃ。（同上、39-40 頁）

資料 2. 旧日吉村における武左衛門顕彰事業・奉納相撲関係年表

1890 年(明 23)	旧 5 ヵ村を合併して日吉村が成立。23 歳の井谷正命を村長に選任。
1897 年(明 30)	この頃、上大野村と父野川下村の境にある勝山城跡を小公園に整地。琴平宮の社殿と武左衛門様と称する社殿があり、旧暦 3 月 10 日と 10 月 10 日に例祭、3 月は花見、10 月は相撲等の催しをし、両部落の人たちの憩いの場になる。
1906 年(明 39)	私立日吉実業学校開設（校長井谷正命、～1915 年まで）。
1909 年(明 42)	村内の神社を合祀して村社 5 社にする。
1912 年(大 1)	勝山城跡の琴平宮と武左衛門様の社殿、氏神に合祀され空家に。のち崩壊。
1913 年(大 2)	宇和島～日吉間に車道が開通。
1917 年(大 6)	下鍵山の氏神・大山祇神社を下山の森から市街地に続く山麓の小高い広場に遷宮。翌年、日吉神社と改称。
1919 年(大 8)	井谷正命、各市町村の有志を説き「済世救民武左衛門翁及同志者碑」制作。
1922 年(大 11)	井谷正吉、「明星ヶ丘我等が村」建設。四国初のメーデーを開催。
1926 年(大 15)	上大野と父野川下村の人々、勝山城跡に「義農武左衛門碑」建立。
1927 年(昭 2)	井谷正吉らが中心となり、近隣の農民の協力を得て、宇和島から「済世救民武左衛門翁及同志者碑」を搬送し、明星ヶ丘に設置。井谷正命、武左衛門一揆を記録した鈴木作之進著『庫外禁止録』の原本を借り受け、写本。
1928 年(昭 3)	高研トンネル竣工。宇和島・日吉・須崎（高知県）間の道路が開通。
1934 年(昭 9)	10 月、井谷正命死去。同月に村葬を執行。
1935 年(昭 10)	下鍵山大火。商店街の大半を焼失（家屋 67 戸、罹災者 179 人）。 地蔵堂(7 月 24 日の奉納相撲の御本尊を安置)を武左衛門広場に移築。 ・以後、恒例の相撲は同広場で開催。「寄り方」と「勧進元」が対抗し、「中入れ」や相撲甚句などがあり、優秀力士に賞品・賞金を授与。昭和 20 年代まで高知・宇和島・東宇和郡の「相撲取り」が来訪。見物人同志が大騒ぎをして楽しむ。地蔵相撲は 180 年ほど前、疫病対策を祈願して神様へ奉納したとされる。若者の都市進出で衰退。現在は 7 月 24 日に代わり、8 月 24 日に実施。 ・上鍵山では、旧 7 月 19 日に医王寺で仏への奉納相撲「大日さん相撲」が開催される。
1955 年(昭 30)	村議会の議決により、井谷正命の公徳碑を建立。 この年、日吉村で盆踊り復活。大正初年まで伝承されていた、一揆衆の帰還を歓迎する盆踊のくどき「帰村」も再興。 日吉村の人口、ピークを迎える。4,779 名（うち男子 2,415 名）。世帯数 859。

1960 年(昭 35)	日吉村商工会設立。この頃から、武左衛門広場の奉納相撲は子供相撲や部落対抗相撲でお茶をにごす程度になる。
1961 年(昭 36)	慰霊塔（忠魂碑）を武左衛門広場に建立。
1966 年(昭 41)	日吉村中央公民館、設立。
1970 年(昭 45)	過疎進行地域指定を受ける。
1976 年(昭 51)	村長に河野幸男氏選任（在任期間：1976～1980 年）。
1981 年(昭 56)	武左衛門一揆を記録した「庫外禁止録」（井谷正命写本）を井谷家で発見。
1983 年(昭 58)	井谷正吉翁顕彰会、井谷正命の公徳碑の横に「明星ケ丘」の碑を建立。 日吉村体育協会、設立。
1985 年(昭 60)	第 1 回「武左衛門ふる里まつり」開催。人づくりによる村の活性化と武左衛門の顕彰をめざす。 ・武左衛門太鼓（1886 年～）・武左衛門行列（1987 年夏～）。
1989 年(昭 64)	上鍵山地区の子供相撲甚句、伝統芸能保存の気運を受け、25 年ぶりに復活。保存会を結成。 ・地区の氏神（日吉神社）の秋の大祭に奉納される出し物。江戸時代から始まるとされ、相撲の起源に関する口上や朝日山、日吉川等の四股名が披露される。
1990 年(平 2)	生活文化若者塾「一希を起こす会」設立。武左衛門広場に古民家復元。
1991 年(平 3)	第 7 回「日吉村ふる里まつり」開催。 ・主催＝実行委員会・日吉村公民館。仮装行列、盆踊り大会、綱引、武左衛門太鼓、成人式などに 2000 人が参加。
1993 年(平 5)	武左衛門一揆 200 年記念事業として「武左衛門を語る夕べ」、「一揆ウォーク」を実施。
1994 年(平 6)	日吉夢産地（道の駅）オープン。第 2 回「武左衛門一揆の道」実施。
1995 年(平 7)	「武左衛門一揆記念館」完成。教育委員会、『庫外禁止録』を発刊。
1998 年(平 10)	武左衛門堂落成。第 2 回「全国義民サミット」を日吉村で開催。
2002 年(平 14)	六地蔵奉納相撲大会、平成 14 年度社会体育事業に指定さる。
2005 年(平 17)	日吉村閉村、鬼北町誕生。

出典：日吉村誌編集委員会編『日吉村誌』(1993 年)、同『日吉村誌　続編』(2004 年)。

資料 3．地図――旧日吉村へのアクセス

（日吉村役場編『日吉村ふるさと写真集』愛媛県日吉村（2004）97 頁より）

あとがき

松山自動車道の大洲ＩＣを降り、肱川沿いに国道197号線を東上して城川町を通り抜け、峠を下って行くと、高知方面と宇和島方面に分岐する三叉路にでくわす。このあたりが、旧日吉村の中心部をなす下鍵山の表通りで、街並みの一画に鬼北町役場日吉支所と日吉公民館がある。松山空港からの所要時間は、約2時間半。東南を眺めると、高研山（たかとぎやま）、地蔵山、長山など、千メートル級の山が連なり、高知県と境を接する。三叉路の近くには広見川が流れ、支流を束ねながら水量を増やし、宇和の海へと注いでいく。

北西に目を向け、山裾の小高い丘を眺めると、真新しい社殿とお堂、相撲場らしきものが見え、その右手に大きな建物がある。この小高い丘を明星ヶ丘といい、そこに武左衛門広場があることを知ったのは、到着後、かなりたってからのことであった。武左衛門は、1793（寛政5）年、吉田藩の楮紙の専売と貢租の過重に反対して一揆を起こした首謀者であり、明星ヶ丘という名は、村の名望家・井谷正吉と親交のあった与謝野鉄幹・晶子ら、明星派に由来するとされている。1922（大正 11）年、井谷正吉の指導のもと、この丘で四国最初のメーデーが開催された。

藩政期のムラである日向谷村、父野川村（ちちのかわむら）、下鍵山（しもかぎやま）、上鍵山（かみかぎやま）、上大野（かみおおの）村を統合して旧日吉村が誕生するのは、1890（明治23）年4月のことであった。2001（平成13）年の旧日吉村の面積は、89平方キロメートル。人口1万9千。世帯数725。総面積の87パーセントが山林で、耕地は田 1%、畑 2%にすぎない。典型的な峡谷型の山村で、農外所得に依存する小規模農業が経営の主流をなす。昭和 30 年代の半ばを境に、過疎化の道を歩んだ。2002（平成14）年1月に広見町と合併し、鬼北町となる。（以上、「日吉村勢要覧」2002年4月、参照）。

「義民伝承と地相撲」というテーマをひっさげ、下鍵山と上鍵山、日向谷（ひゅうがい）など、旧日吉村域を訪れたのは、2011（平成23）年7月のことであった。翌年9月、再び日吉を訪れ、あわせて6名の方々にインタビューを行なった。

最初の相手は、大森時政さん。1941 （昭和16）年9月生まれの72歳（年齢は現時点。以下、同じ）。下鍵山の老舗旅館「梅の屋」のご主人で、助役の経験があり、『日吉村誌』の編集にも携わった博識の人である。時政さんから、武左衛門一揆や井谷親子の成し遂げた事績、旧日吉村の特徴など、私の調査対象である奉納相撲のバックボーンとなる基礎的な知識について、レクチャーを受けた。この冊子に収録した時政さんとのインタビュー「義民伝承と民俗行事：六地蔵奉納武左衛門相撲のこと」は、そのときの2時間にわたる質疑応答の概要である。

2番目のインフォーマントは西村善太郎さんで、1931（昭和6）年生まれの80歳。下鍵山から父野川に入る街道の入口のところに小さな集落が道に沿って軒を並べており、左側の中心部を少し越えたところに、善太郎さんのお宅があった。最近まで農業を営み、引退後はゲートボールに親しんでいる。2 回にわたる実地調査で出会ったインフォーマントの

なかでは、最長老に属する。若い頃は、四股名を持つ素人力士で、仲間とともにこの界隈の相撲大会に出場し、賞金を稼ぐことを楽しみにする青年だった。善太郎さんの語りをとおして、地蔵堂建立（1935 年）以前の武左衛門広場と相撲場の様子、六地蔵相撲をはじめとする旧日吉村の奉納相撲の起源、武左衛門信仰と奉納相撲の関係、8 月 24 日の取り組みの概要、時代とともに変化する観衆の様子など、貴重な逸話を知ることができた。本冊子に収めた「地相撲に託す人びとの願い：六地蔵と武左衛門への奉納」は、2011 （平成 23）年 8 月 23 日に行ったインタビューの内容である。

3 番目のインフォーマントは、上鍵山在住の山口孝さんで、1936 (昭和 11)年 12 月生まれの 75 歳。インタビューは 2011 （平成 23）年 8 月 23 日の昼過ぎ、医王寺を望む小高い山の中腹にある孝さんのお宅で行われた。孝さんは青年時代、上鍵山の青年団を代表する強豪力士で、近隣の相撲大会に出場して賞金を稼いだ経験を持つ。インタビューをとおして、当時、相撲が農山村の最大の娯楽であったこと、子どもの頃から野良の仕事でからだを鍛え、それを基礎にして村里の相撲文化が繁栄したこと、農山村には賞金制にもとづく宮相撲が広く展開し、それと融合しながら、しかも相対的な自立性を保つかたちで青年団の「アマチュア」相撲が併存したこと、六地蔵相撲と武左衛門相撲の異同、武左衛門信仰と武左衛門相撲の関連、地相撲の有名力士のことなど、貴重なお話を聴くことができた。インタビューの内容は、「仕事で鍛え、相撲で試す：賞金と名誉を競う素人力士」という表題でこの冊子に収録した。

4 人目のインフォーマント・山本喜久夫さんは、1935（昭和 10）年 10 月生まれで、76 歳。国道 197 号線に沿った下鍵山の中心地に在住する。2012 （平成 24）年 9 月 10 日、自宅を訪れてお話を伺った。喜久夫さんは、旧日吉村の相撲が盛んだった 1950 年代半ば 60 年代半ばにかけて青年期を日吉で過ごしている。高度経済成長の波が日本の津々浦々に押し寄せ、過疎化が始まる頃のことだった。その意味において、喜久夫さんの語りは、日吉村における相撲がピークを迎え、退潮にむかう時期の様子を伝えているといえるだろう。喜久夫さんはまた、六地蔵相撲の開催地の変遷について詳しく語り、武左衛門相撲という呼称の登場を、平成の村興し以降、すなわち、ごく最近の出来事として語っている。下鍵山の夏の奉納相撲を、武左衛門ではなく、六地蔵とのかかわりに力点を置いてとらえようとするのである。このことは、下鍵山、そして旧日吉村の人々にとってどのような意味をもつのか。改めて考えてみたいと思う。そのような思いを込めて、インタビューの表題を「三十三番で結ぶ伝統の大取組：ムラの安寧と繁栄の証」にさせていただいた。

5 人目のインフォーマント・山本決（さだむ）さんは、1943 (昭和 18) 年生まれ。下鍵山在住。紹介者の山本喜久夫によれば、ボデン作りの達人で、結びの口上に詳しい人とのこと。結婚するまで相撲に興じ、以後、下鍵山の奉納相撲に関する伝承を古老や関係者から数多く回収し、正確に記憶にとどめておられた。結びの勝負は引き分けて来年に持ち越すこと。そして、その由来。さらに、かつては 8 月 24 日の翌日も、賞金・賞品制の相撲が催されたこと。観衆への力飯やお酒の振るまいと、その民俗的な意味。三十三結びの取り組みと地

蔵信仰、あるいは、観音信仰との関係。番付の編成のしかた、などなど。地相撲研究にとって極めて重要な事柄を、流暢に語っていただいた。武左衛門相撲という呼称の由来を、20年あまり前の河野村長の地域振興策、いわゆる「ふるさと祭り」のイベントに求める点は、山本喜久夫さんの見解と共通する。旧日吉村における民俗行事と義民伝承の関係を考察するうえで、避けて通れない論点だといえるだろう。

ラストを飾るインフォーマントは、宮本幸孝さん。1932（昭和7）年生まれの78歳。高知県境にそびえる高研山（たかとぎやま）のふもと、日向谷（ひゅうがい）でもかなり奥まった、しかし、見晴らしのいい高台に住居がある。2012（平成24）年9月12日の午前中、幸孝さんは老人会の集まりで下鍵山に出かけており、インタビューはその日の午後、帰宅を襲うかたちで行われた。酒気帯びのなか、双方向ではなく、一方向的な対話となったが、幸孝さんは見事な哲学を語ってくれた。要約すれば、「地相撲は人を育て、村を固め、地域を拓く」ということになるだろう。農林土木に必要な肉体の力と、知的な力が同じ人格のなかで統一され、人々を束ねて集落の活力となるとき、地域は躍動する。そのようなメッセージが込められていたように思う。けれども、日向谷に生きた力士たちは、定住と流浪との板挟みで葛藤し、時代の波に翻弄されながら懸命に生を全うした人たちであったともいう。その生き様を、孝幸さん自身の生と重ねて追慕しようとするところに、このインタビューの魅力があるといえるだろう。そのような理由から、表題を「峡谷に響く力士の息吹：人を育て、地域を拓く」とさせてもらった。

以上の6名が、私の2度にわたるフィールドワークでじっくりお話を聴くことのできた人たちである。すでに現役を退いておられるが、元役場職員、農林業者、燃料店経営者、畳職など、多様な職業の経験者を網羅しており、奉納行事として行われる地相撲の世界を、多角的にとらえることができたと思っている。だが、残念ながら、インタビューの対象は全員男性であって、女性の声を聴いていない。悔いが残る。このことに関連して、言い訳になるのだが、梅の屋の女将（大森十四香）さんから聴いた次の言葉（2011年8月23日）を書きとどめておきたい。

「子どもの頃、男の子も、女の子も、盂蘭盆の奉納相撲が楽しみだった。屋台や出店が出て、親戚の人が泊まりに来て、8月24日は夏休みが終わる直前だったが、宿題もせずに相撲を見に行った。相撲が楽しいのではなく、小遣いと遊び、祭りが楽しかった。」

最後に、日吉公民館主事・山本雄大（たかひろ）氏にお礼を述べたい。2回のフィールドワークは、日吉公民館から始まった。山本主事からアドバイスを受けることができ、ここを前線基地にすることによって、この小冊子は生まれたのである。

いろんな人に支えられて、旧日吉村での2回のフィールドワークを終えることができた。義民伝承と地相撲――もうしばらく、このテーマに取り組んでみようと思っている。

2013年1月15日

高津　勝

聞き書き　武左衛門相撲（別名・六地蔵相撲）
――愛媛県北宇和郡旧日吉村の民俗行事――

2013 年 1 月 15 日
編集　高津　勝
発行　こども教育宝仙大学　高津研究室
〒 164-8631　東京都中野区中央　2-33-26
℡　03-3365-0267
URL: http://www.hosen.ac.jp/kodomo/